

東洋學藝雜誌第十三號

明治十五年十月廿五日發兌

○神論

杉浦重剛

孟子曰ク聖ニ知ルベカラザル之ヲ神ト云フ余曰ク聖ト雖トモ未ダ知ル能ハサル之ヲ神ト云フ今來古往學者ノ間ニ起レル有神無神ノ論ハ其是非何レノ時ニ決定スベキヤ未ダ知ルヘカラス要スルニ無神論ヲ主張スルモノハ有限ノ智識ヲ以テ無限ナル不識界ノ事ヲ決定セントス妄モ亦甚シト云ヘシ夫レ無神論ヲ主張セント欲セハ須ラク先神ノ何タルヲ知ラサルベカラス而シテ此神ナル者ハ又有神論家ノ神ト同一ナルヲ證セサルヘカラス神ヲ以テ造物主トスルニ無神論家ハ今日ニ到ルマテ未ダ無神ノ確證ヲ舉ケタルヲナシ僅ニ聖書ヲ批評シテ其誤謬ヲ正スニ止ルノミ然レモ聖書モ亦固ヨリ他ノ諸物ト一般ニソ人造物ナレハ其誤謬アルハ少シモ怪シムニ足ラス退テ其論鋒ノ根據トスル理學ナルモノヲ見ルニ其濫輿ニ到レハ多少ノ類似神ナキニ非ス其一二例ヲ舉クレハ物理學ノ(イーサル)化學ノ原子ノ如キモノ是レナリ之ヲ以テ之ヲ推セハ類似神ノ宗家ナカルヘカラス已ニ如此ク論鋒ノ根據タル理學

ニ於テスラ猶解スベカラサル類似神アレハ其他ノ事物ニ於テ解シ能ハサルモノ、多キハ固ヨリ論ヲ俟ダス之ヲ要スルニ今日マテ人間ノ收獲シタル智識ノ度ヲ以テ未ダ無神ト斷言スルヲ能ハス之ヲ斷言スルハ徒ニ其不智ヲ證スルノミニソ真理ヲ講スルモノ、深ク愧ツヘキトコロナリ然レモ有神論家モ亦一方ニ偏シテ妄信ノ謗ヲ免レス蓋シ神ハ現今人間ノ智識ニテ未ダ解シ能ハサル事物ノ一ナレト他日之ヲ解シ得ルノ日ナシト斷言スルヲ能ハス而シテ其時ニ及ンテ從來有神論家カ根據トセシ神ノ全ク存在セサルヲ證スルヲ得ルヤモ料リ難シ故ニ聖ト雖トモ未ダ知ル能ハサル之ヲ神ト云フモ敢テ不可ナカルベシ或曰ク然ラハ即チ子ノ期スルトコロハ如何余之ニ答ヘテ曰フ未ダ知ルヲ能ハサルヲ講究シテ之ヲ知り以テ人間共有ノ智識ノ範圍ヲ擴メ其極點ニ達スルニアルノミ

ありとしよくぶつとの

くわんけね

ごと、たのま

ありとしよくぶつとのくわんけ、えわさま



さまあるあらん、ろの うちよさの ふぶつ の  
 く、わんけ、えあるがごとし、ろの ひとつわー、よく  
 ぶつが ありの たまけよよまてぶつを 寄せむし  
 をふせぐこと、たの ひとつわー、よくぶつが あり  
 よ、いおのみつを 寄せられぬ たれよてだてを  
 も、たくることなま、 **そ**らまめとやいすえんぞ、れ  
 (Vicia angustifolia) ふわろの うらむ (たくよ、か) の  
 うら ふくろきてん あり、この くるきてん わみつ  
 を つくるところ 寄せわらみ、つせんならん、ありの  
 この てんよまつを 寄せんとて とどまるをしむ  
 し、みることあり、 **ひ**あたさくらの のの ね  
 よわいばの ごときみ、つせんあり、まこと、かごま  
 よもこれよ ありたるみ、つせんあり、まごさりの  
 のの ねづらよもみ、つせん の ごときもの ありて  
 ぬづれのみ、つせん よもありの つくを みたたり、  
 さりの ともあるもれわとの ねの ともづらよ  
 つくところよ ことよれ、れくありて ことないごこ  
 まかきもの あり、 **こ**これらの み、つせん わとな

の ともよ ありて その これよれ とも の うちよ  
 あるみ、つせん とおるじからず、 さくらの ごとき  
 わとあ の ちりたるの ちとの せ、えちよ、かほる  
 ときよみ、つせんも できるなま、 ゆねよこれらの  
 み、つせん わとあ とく、わんけ、ねなきこと ありらう  
 あり、 **は**あ の うちよ ありみ、つせん わちよ、れ  
 あぶあを 寄せよせて、ゆ、うの なかごちを  
 あさ、れみを 寄せむ、めんが たれのもの あり、  
 しかるよ とな の ろとよ ありみ、つせん わありを  
 ひきよせんが ためふ できたるもの の ごとま、  
**と**れごまの ともねよ ありみ、つせん の ひとつ  
 わろの ねづらよ つくところ ありて ともづらよ  
 かくれ ありよわ た、つー やせけれ とも ちよ、れ  
 あごあ わいあを ぐみいだー やせからず、 **あり**  
 の お、かくー、よくぶつ ありあつまる わその ためよ  
 りねき ありことなま、 ぬかんと 寄せバかくの  
 ごとき **ま**、よくぶつ ありその ねとく、うむーなご



しよたずればありこれをさこびざりてろのが  
 いをのぞくべー(しかししよくぶつをびいほる  
 ひーのうらよわありをれろれざるものも  
 あり) ゆゑよこれらのしよくぶつとあり  
 とのくわんけえわよんげんとねことのくわん  
 けのこどー!

しかれともいあのうらのみつわあぶ  
 ちよたあどをまねくた究のものおれをこきを  
 ありよそのめざるてごくなかるべりさ  
 むしとりあでこのくきよつきふるもちの  
 ことくねばるものわこのもくつきをいつせるが  
 こどー! このもちのこときもれわくきれ  
 ち究んよちかきぶぶんよわあくしてたぶその  
 すねのねぶわかれーてはなのつくへんよのみ  
 あり、かつふーのしたよありさうねよわあし、  
 ちあわちづのイロの  
 ところよあま、この  
 ねばりもののあるところわありのつうこれでき



がふし。これをた究ーするよちんさきあか  
 ありわあしねぱりつきてしんたいさることおね  
 ざりき、くまわりのこときたたいなるありよて  
 もこのところをどれどこそこといよやとこん  
 かんなりき。このねりものわくきのうねの  
 ぶぶんよあるがゆえよーたよりのぼりきたま  
 たるありのはあのはたよゆかんとするものを  
 ふせぎとむるといえごもづの口のへんよま  
 したのはのうえをはいまあることいさまふげ  
 ざるなま。このねばりものがふしのーよ  
 よあまてふしのただちようえのねぶわかきー  
 たるところよあきわあまよふせぐためよね  
 ちりもれをむえきよつんやさそかしこくもちん  
 たるーうたとぬうべー。ぜよあをぬのいあ  
 あま(Salvia Nipponica) のいあまよわみつ  
 ねあるところのうえよけあまてこれをおをぬ  
 かくしちよたあどあわみつとすうことできる



といふどもありまたいふのやかーゆうのなり  
 ぶちをせざるちいささむしよわみつよちう  
 よることできぬよおよあまておるあり  
 ぶあたるはほうはあよもいるいろのしうた  
 みてみつのあるところありあどをちうづけ  
 ぬものあり

○微分ノ原理

理學部長 菊池大麓

算術中ニ一種ノ問題有リテ嚴密ニ之ヲ解スルハ決シテ爲  
 ス可カラサル事ナレト此問題ニ適スルニ近キヲ吾意ノ如  
 シナル可キ數ハ必ス得可シ例ハ $\sqrt{2}$ ノ自乗根ヲ求ム今 $\sqrt{2}$ 自  
 乗スレハ $1.41421356237$ ナリ $\sqrt{2}$ ノ自乗根ハ此間ニ在  
 ル分數ナル可シ然レキ分數ヲ自乗シテ決シテ全數ヲ得ル  
 能ハス故ニ自乗シテ嚴密ニ $\sqrt{2}$ ナル數ハ決シテ無シ然レ  
 此問題ヲ變シテ曰ク之ヲ自乗スルキハ其自乗數ト $\sqrt{2}$ ト  
 ノ差ヨリ小ナル可キ數ヲ求ムト此問題ハ $\sqrt{2}$ ハ何程小ナル  
 モ必ス之ヲ解スルヲ得可シ例ハ吾輩ハ其自乗數ノ $\sqrt{2}$ ト  
 $1.41421356237$ トノ間ニ在ル所ノ數或ハ $1.41421356237$ トノ間ニ在  
 ル所ノ數ヲ得可シ

余ハ何程小ナルモト言ヒタリ此小ナル語ハ唯一語ニテハ  
 意義甚不明ナリ凡ソ大小トハ何ソヤ何如ナル數量ヲ大ト  
 言ヒ何チカ小ト言フ可キヤ物ト事トニ從テ同量ニソ小ト  
 モ大トモ言フ可シ例ハ六尺ノ人ハ大男ナレト六尺ノ樹  
 ハ大木ニ非ラス直徑一寸ノ「ダイヤメント」ハ非常ニ大ナ  
 ルモ一寸ノ御影石ハ甚小ナリ一家十人有レハ多人數ノ家  
 族ト言フ可シ學校ノ生徒十人ナレハ少人數ノ學校ナリ是  
 ノ如ク大小ノ語ハ確定辭ニ非ラス比較辭ナリ然レト何ハ  
 何ヨリ小ナリ或ハ何ヨリ大ナリト云ヘハ事確定セリ例ハ  
 ハ六尺ハ其人ニ付テ言フト樹又ハ其他ノ物ニ付テ言フト  
 十間ハス常ニ五尺ヨリ大ニソ七尺ヨリ小ナリ余先ニ $\sqrt{2}$ ハ  
 何程小ナルモ $\sqrt{2}$ ヨリ $\sqrt{2}$ ニ近キ數ヲ得可シト言ヘリ蓋シ  
 其意ハ一定ノ小數有リトスルニ非ス例ハ $\sqrt{2}$ ハ $\sqrt{2}$ ニテ  
 以テ小トスルモ乙ハ之ヲ小トセス、 $\sqrt{2}$ ニテ以テ始テ小  
 ノ稱ヲ下ス可シトスルコト有ラン余ノ意ハ唯 $\sqrt{2}$ ヲ隨意ノ數  
 トセヨ其 $\sqrt{2}$ ナルカ或ハ $\sqrt{2}$ ナルカ或ハ $\sqrt{2}$ ナルカ  
 ナルカ等ハ更ニ關セス之ヲ何トスルモ余ハ必ス其自乗數  
 ト $\sqrt{2}$ トノ差之ヨリ小ナル數ヲ發見スルヲ得可シ故ニ何程



大ナルモ又ハ何程小ナルモト言ヘハ其意義ハ明白ナリ

上ノ如ク嚴密ニ解ス可ラサルモ隨意ニ近ク解ス可キ問題

ニ於テハ平常先ツ假ニ其解ヲ設ケ現ニ得ル所ノ數此解ニ

近キニ從テ吾輩ハ彌近ク此問題ヲ解シタリト言フ例ヘハ

吾輩ハ自乘シテヒト成ル數無シトハ言ハス假ニ是有ルモ

ノト倣シ之ヲ顯スニクニテ以テス而シテ吾輩ハ現ニクニテ

發見セズ唯之ニ近クノミ左ノ諸數ヲ取リ

(一) 2 (七) 1.414214

(二) 1.5 (八) 1.4142136

(三) 1.42 (九) 1.41421357

(四) 1.415 (十) 1.414213563

(五) 1.4143 (十一) 1.4142135624

(六) 1.41422 (十二) 1.41421356238

之ヲ自乘スレハ其積ハ漸々ニ近ツキ皆ヨリ多シト雖一

ノ自乘ハニ過ルコトナルコトニ自乘ハニ過ルコト

1,000,000,000 即 .000,000,001 ヨリ少シ且吾輩之ヨリモ

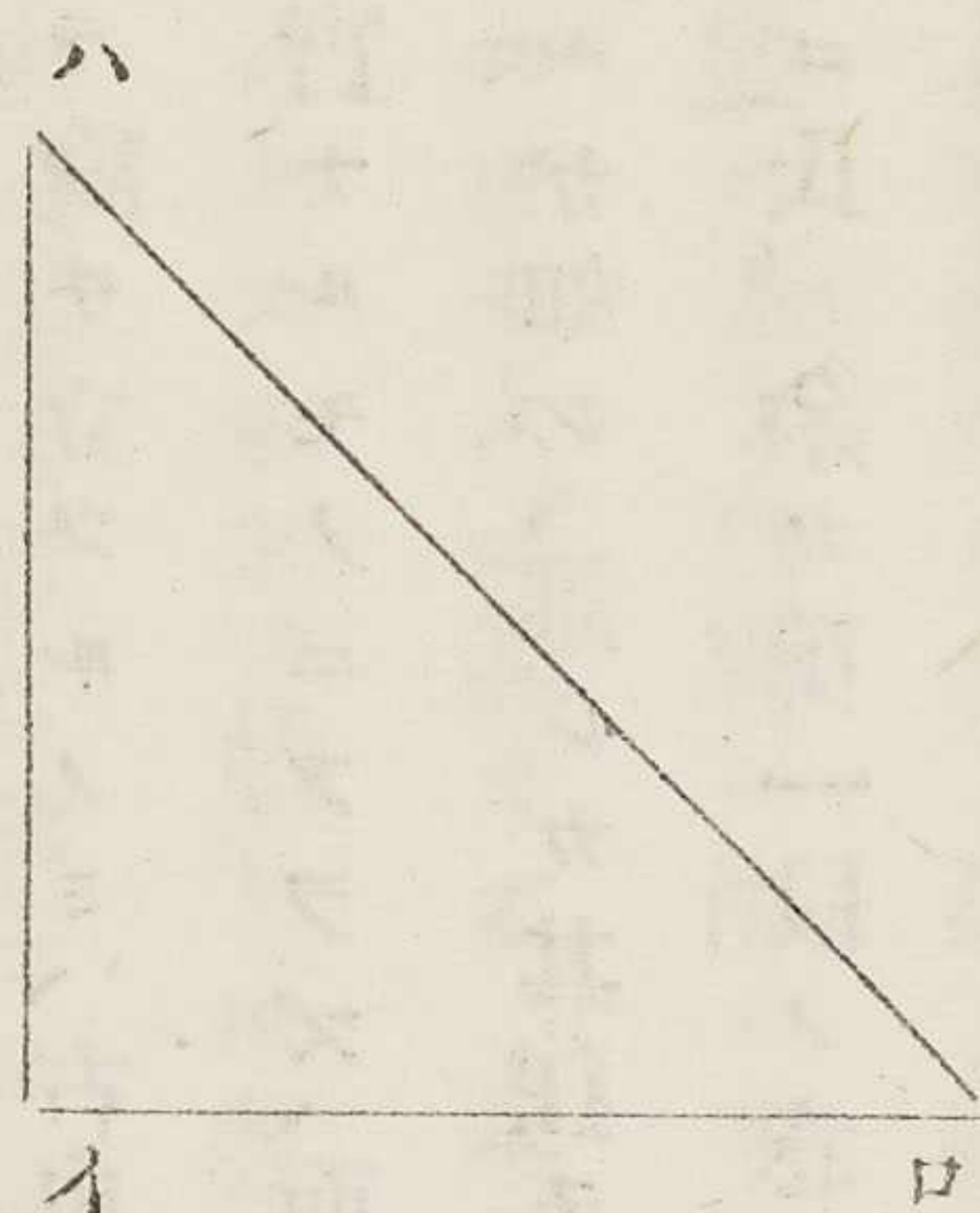
尙クニ近キ數ヲ得可シ斯ク實ニ自乘シテヒト成ル數ハ

無シト雖吾輩漸々ニ之ヲ近クテ得然レハクニハ現存セサ

ルモ是吾輩ノ常ニ近ツク所ノ極根ナリ

幾何學ニ由レハ此ノ得ル能ハサル極根ニ稍明白ノ意義有

リ



此ニ一線イロヲ取リ其長サヲ  
一トシテ之ニ直角ニイハチ畫  
キ其長モ亦一トス然ルキハロ  
ハ線ノ長サハクニナリ

(以下次號)

○牧都宇氏ニ答フ

井上圓了

一日友人某氏アリ、余ヲ草廬ノ下ニ訪フ、忽チ一小冊子ヲ

袖中ニ出ダシ、余ニ示シテ曰ク、氏嘗テ東洋學藝雜誌中ニ

堯舜ハ孔教ノ偶像ナル所以ヲ論ゼラレタリシガ、今此紙

中氏ノ論ヲ駁スルノ一篇ヲ得タリ、請フ一讀スベシト、余

受テ之ヲ見レバ、則チ東京經濟雜誌ニシテ、牧某論者アリ

テ余カ論ヲ評セラレタルナリ、余曩ニ堯舜論ノ一篇ヲ草

スルヤ、固ヨリ一時ノ意想ニ出デ、實事ノ以テ徵スベキ

ナク、理論ノ以テ證スベキナク、之ヲ世ニ公ニスルヤ管見

ノ誹ヲ免カルベカラザルヲ知ルト雖也、之ヲ胸裏ニ包藏



スルモ、余カ本志ニアラザルナリ、乃チ爰ニ東洋學藝雜誌ノ餘白ヲ乞テ之ヲ世間ニ公布シ、以テ有識ノ明教ヲ待チシガ、幸ニ牧氏ナルモノアリテ高評ヲ施サレタルハ、余カ喜テモ猶ホ餘リアル所ナリ、乃チ之ヲ披キ一讀未タ終ラザルニ、忽チ知ル牧氏ハ支那史ノ一面ヲ見テ全局ヲ察セズ、余ガ所論ヲ誤解スルモノナルヲ其評中高言聞クニ忍ビサルモノアリ、偏見笑フニ堪ヘタルモノアリ、余輩一點モ其駁論ニ服スル能ハズ、因リテ逐次之ヲ辨明セントス、第一ニ氏余ヲ評シテ曰ク、其論據ヲ固ムルニ如何ナル實事ト推理ヲ以テセシキ見ルニ、曖昧糲糊、一モ取テ論スベキナシ、所謂ル捕風捉影ノ論據ナルノミト、之ヲ推スニ此言タルヤ、氏ハ自ラ思ヘラク、吾論獨リ確乎タル論據ヲ有シ、實事ト云ヒ、推理ト云ヒ、皆悉ク明カニ證スベキモノアリト、自ラ許スモノニアラズヤ、然シテ氏ノ論據ヲ尋ヌルニ一以テ確實彰明ナルモノナシ、其論大抵證ヲ古史ニ徴シ、以テ上代文物ノ盛ナル所以ヲ喋々セラレタリト雖モ、氏ハ徒ニ古史ヲ妄信スルノ甚シキモノト謂フベシ古史ニ載スルモノ悉ク確實ニシテ信ヲ置クベキモノナラ

バ、今日ノ史家、何ツ復々汲々トシテ舊跡ヲ尋テ、古器ヲ探リ、實物ニツイテ之ヲ研究スルヲ要センヤ、且ツ古史若シ信スベクンバ、我邦ノ神代史西洋ノ創世史ノ如キモ、皆確論實說ニシテ、疑ヲ容ルベカラズトセンカ、他邦ノ古史ハ、妄誕ニシテ支那史獨リ確實ナルノ理アラシヤ、而シテ思ヘラク、彼國古代ノ事跡ハ、多ク人ノ口碑ニ存スルモノナリト、然ラバ口碑ニ存スルモノ果シテ信ヲ置クベキカ、蓋シ人ノ言語ニ存シ、談話ニ傳ハルモノ、決シテ信據スベカラザルハ、皆人ノ許ス所ナリ、縱令ヒ史籍ニ記載アルモ、古代文字ノ乏キ、紀事ノ疎ナルニ當テハ、未ダ以テ信ヲ考フベカラザル、又人ノ知ル所ナリ、然ルニ牧氏ハ唯古史ニ據テ論ヲ立ツルノミ、古史ハ信ズベカラズ、故ニ氏ノ所論確實ナルモノニアラズ、而シテ氏自ラ確論實說ナリト誇言スルガ如シ、誰レカ其狂ヲ笑ハサルモノアラソ、

次ニ氏ハ余カ第一段ノ意ヲ評シテ喋々數十言ヲ費シ、而シテ曰ク、其推測ノ疎ナル、實ニ驚クニ堪ヘタリト余輩却テ氏ノ推測ノ疎ナルニ驚ク、余カ第一段ニ説ク所ノモノ、唯一篇ノ論意ヲ起スノミ、決シテ此一段ヲ以テ全論ノ意ヲ



證スルモノニアラザルナリ、支那史ヲ讀ムモノ誰レカ堯舜二世ノ文物盛ナルニ驚カザルモノアラン、誰レカ禹湯以下ノ時運ノ衰ヘタルヲ怪マザルモノアラン、是レ余カ一篇ノ論端ヲ起セシ意ナリ然ルニ氏冗言ヲ費シ、世ニ盛衰アリ、國ニ隆替アルハ、時運ノ然ラシムル所ナリト云ヒ、或ハ古代史籍ノ備ハラザルニ當テヤ、大功業アルニアラザレハ、人ノ言語間ニ傳ハルベカラズト云フガ如キ、皆余カ論ヲ了解セザルヨリ起ル、余カ意敢テ堯舜ハ平凡ノ君主ナリト云フコアラズ、其二世ノ間記スベキ事業ナシト云フニアラズ、其君徳ト云ヒ、功業ト云ヒ、歴代奕世ノ君主ニ比スレハ、聖人ト稱スベキホドノ帝王ナルハ、余カ已ニ許ス所ナレト其人タル完全無瑕ノ聖人ニテ其道タル萬世不易ノ定理ナルハ、余カ服スル能ハザル所ナリ凡ソ世界萬國ノ史ヲ檢スルニ、文物ノ進歩スルアリ、却歩スルアリ、其變遷一ナラズト雖モ、概スルニ草昧ヨリ文化ニ進ミ、野蠻ヨリ開明ニ移ルハ、世運ノ常コシテ別ニ之ヲ證明スルヲ要セズ、然ルニ之レニ反シ太古ノ文物近古ニ超越スト云ハ、確實ナル論據ナクンバアルベカラズ、牧氏ノ堯

舜ヲ論シテ其制度近古ニ超越スト云フハ、何ノニヨリテ之ヲ證スルヤ、唯史記本紀中ヨリ其論據ヲ舉グルニ過ギ、其本紀ナルモノ果ソ確論實說ナルヤ、是唯孔孟其他ノ遺書並ニ人ノ口碑ニ傳ハリ、俗諺ニ存スルモノヲ集メテ編成スルモノニ過キズ、誰レカ其紀事ヲ以テ悉ク明證アルモノトスルヤ、然レトモ牧氏ハ證ヲ古史ニ引テ余ヲ駁スルヲ以、余亦之レニ答フルニ古書ヲ用ザルベカラズ、讀者幸ニ之ヲ諒セヨ、  
牧氏曰ク、支那太古ノ制度ハ、近古ニ超越スルモノナリト、之ヲ證セント欲シ、乃チ曰ク、堯舜ハ利民ヲ先ニシ、仁義之レニ次グト、本紀ヲ引テ、堯舜ノ山ヲ鑿リ、川ヲ通シ運輸ノ便ヲ開キ、殖産ノ利ヲ興ス等ノ事ヲ掲ゲ、而シテ曰ク、見ルベシ、利民先キニシテ禮樂仁義後ナルヲ、孔孟ノ未ダ夢ニダモ知ラザル分業法ノ此時既ニ行ハレシヲト、氏ノ時勢ヲ辨セズ、事情ニ暗キ、此ノ如シ、余爰ニ其理由ヲ開陳シテ論者ノ迷夢ヲ解カントス、孟子ニ曰ク當ニ堯之時、天下猶未レ平、洪水橫流、氾濫於天下、草木暢茂、禽獸繁殖、五穀不レ登、禽獸逼人、獸蹄鳥跡之道交、於中國ニ云云ト知ルベシ、當時人民衣



食ヲ得ルニ難フシテ一日モ寧居安臥スル能ハザルヲ、此  
 民ヲ治ムルニ利生ヲ以テ先キトセンカ、仁義ヲ以テ先キ  
 トセンカ、當時ノ勢ヲ以テ之ヲ觀ルニ、仁義ヲ以テ先キト  
 セント欲スルモ、豈得ベケンヤ衣食足リテ而シテ後禮節ヲ  
 知ルハ、勢ノ止ムベカラサル所ナリ、孔子ノ時ハ然ラズ、洪  
 水ノ陵ニ襄ルナク、猛獸ノ人ニ逼ルナク、衣食己ニ足リ、利  
 用己ニ達ス、於是乎仁義施スベシ、禮樂行フベシ、然ラバ、堯  
 舜ノ利民ヲ先キニシ、孔孟ノ仁義ヲ先キニシタルハ、時勢ノ  
 然ラシムル所ニシテ太古ノ文運近古ニ超越スルノ致ス所  
 ニアラザルナリ。

次ニ氏曰ク、篇中第二三段ハ、野蠻社會ニ教法ノ起ル所以  
 ト教主ヲ定ムルノ止ムヲ得ザル所以ヲ論ゼシモノニシ  
 テ、普通ノ道理ナリ、敢テ本論ニ關係ナキモノナレバ、之ヲ  
 駁スルヲ須サズト、是レ何ノ言ヅヤ、余カ一篇ノ論ヲ立  
 ツル主眼ハ、此二三段ニアリ、此理ヲ推シテ或ハ史ニ徴シ、  
 或ハ事ニ考ヘ、以テ堯舜ハ孔教ノ偶像ト云フ一題ヲ結ブ  
 ニ至ル、然ルニ氏ハ之ヲ本論ニ關係ナキモノトシテ評セ  
 ザルハ此段ニ異見ナキヲ以テ然ルカ、

氏又第四段ヲ評シテ曰ク、其謬妄實ニ笑フニ堪ヘザルモ  
 ノアリト、余ヲ以テ之ヲ見ルニ、氏ノ謬妄真ニ笑フニ堪ヘ  
 ズ、甚哉氏ノ史ヲ讀ムノ疎ナルヤ、其言ニ曰ク、陸ニ車アリ、  
 水ニ舟アリ、云々ト、氏ハ定メテ本紀中ノ禹ノ舟車ヲ用非  
 テ山河ヲ經過セシヲ讀テ云フナラン、決シテ實物ヲ見テ  
 知ルモノニアラザルベシ、縱令ヒ古代ニ舟車アルモ、今日  
 ノ如キ完全安逸ナルモノニアラザルヤ必セリ、其極メテ  
 粗ナルモノ固ヨリ家屋ヲ築造スルヨリ易シ、其設ケアル  
 ハ必スシモ家屋ノ後ニアルノ理ナシ、然レモ余論決シテ  
 當時ノ人民家屋ヲ築造スルノ法ヲ知ラズト云フニアラ  
 ズ、堯既ニ茅茨土階ノ宮室アルヲ見テ明カナリ、唯余意下  
 民悉ク堯ノ如キ宮室ヲ有セザルヘシト思フノミ、今禹行ク  
 ニ舟車ヲ用ユルモ、禹ハ在官ノ人ナリ、之レカ臣民タルモ  
 ノ悉ク舟車ヲ有スルノ道理ナク、帝王ハ宮室ニ居住スル  
 モ、下民悉ク家屋ヲ設クルノ理由アラフヤ、孟子ニ曰ク、  
 當ニ堯之時ニ水逆行汎ニ濫於中國ニ蛇龍居レ之民無レ所レ定下  
 者爲ニ巢上者爲ニ營窟ト見ルベシ堯ノ時ハ人民穴居巢棲  
 スルモノ多キヲ、然ルニ人民悉ク普通ノ家屋ニ棲居セシ



ハ、洞トシテ火ヲ觀ルヨリモ明ナリト論ゼラレタルハ、嗚呼何ノ意ヅヤ、書ヲ見ルノ狹キ、史ヲ讀ムノ疎ナル、此ノ

如キ妄想ヲ爲スニ至ル豈憫笑セザルベシヤ

次ニ氏ハ余カ舜ノ諸業ヲ兼ヌルハ、太古分業ノ未タ開ケ

ザルヲ以テナリト云フヲ駁シテ、妄亦益甚矣ナド、喋々

サレダレト、余意決シテ諸業ヲ兼ヌルモノ盡ク野蠻人ナリ

ト云フニアラズ、唯古代一般ノ風俗ニツイテ之ヲ推スノ

ミ、氏ハ果シテ堯舜ノ時下民悉ク分業ノ法ヲ用ヒ、農工商ノ

別アル所以ヲ知ルカ、其證ヲ引クニ禹稷契等ノ各業ヲ分

テ國ヲ治メシ所以ヲ以テス、是又笑ハザルヲエズ、凡ソ物

ニ大小ノ別アリ、事ニ難易ノ差アリ、大事ヲ爲スノ法ハ小

事ヲ行フノ道ト同日ニ論スベカラス、國家ノ政事治法ノ

如キハ、之ヲ一家ノ職業ニ比スルニ大事難件ト謂フベシ、

故ニ政治上分業ノ法ヲ用ユルモ下民悉ク業ヲ分テ生テ營

ムベキノ道理ナシ、方今日本ノ如キハ、其政治上ト云ヒ、家

業上ト云ヒ大ニ分業ノ行ハル、モノト云フベシ、而シテ今

日尙ホ山間ノ僻地ニ入レバ、分業ノ數漸ク減シテ、一家ニ

テ農商ヲ兼テ、一人ニテ工農ヲ兼ヌルモノ少シトセズ、然

ルニ我朝ニ文武百官ヲ置テ政治ヲ分チタルハ遠ク文武天

皇ノ時ニアリ、此時下民悉ク農商工ノ別アリテ果シ今日

ノ如キ分業ノ法ノ行ハレシモノトスルカ、氏ノ論ノ如キ

ハ政治上分業ノ設アルヲ以テ山間僻地貧民下輩ニ至ル迄

悉ク分業ノ法ヲ用ヘキモノトナス臆測モ亦甚シ、

氏又余後段ノ論ヲ評シテ曰ク、其論據ヲ構造スルニ、僅ニ

分業行ハザリシト云フ一項ヲ敷衍シテ其元素トセリト、

余輩ノ分業ヲ論シタルハ、舜ノ野ニアルニ當テ、一人ニテ

農工商ヲ兼テタル一點ヲ云フノミ、然ルニ之ヲ以テ全論

ノ元素ナリト云フカ如キハ、人ヲ誣ユルノ甚シキモノナ

リ、其他何レノ所ニ余輩ハ分業ヲ論シタルヤ、堯舜ハ孔教

ノ偶像ナル所以ハ、余輩果シテ分業ノ理ヲ以テ證セシカ、乃

チ知ル氏ハ余カ論ヲ評セントスルニ當リ、堯舜ノ時已ニ

分業ノ行ハル、ノ一點ヲ以テ余カ論ヲ破ラント欲シ、一

篇ノ駁論ヲ草セシナラン、若シ然ラバ氏ノ論ノ元素ハ分

業ノ一點ニアリ、余既ニ之ヲ論破スルヲ以テ、氏ノ論爰ニ

立ダザルヲ知ル、余輩復タ言ヲ費スナ要セズ、ハ、氏終ニ臨ニ漫リニ堯舜ヲ尊崇シ、萬世不易ノ定理、日月ト



悠久ヲ爭フト云フカ如キハ、古チ信シ自ラ許スノ甚シキ  
 モノナリ、氏ハ之ヲ論セント欲シ、喋々數千言ヲ費ヤセシ  
 ト雖モ、一言ノ取テ以テ考フベキナシ、苟モ活眼ヲ以テ史  
 ヲ讀ムモノ、誰レカ古史ノ妄誕ヲ知ラザルモノアラシ、誰  
 レカ堯舜ノ世ノ草昧野蠻ナルヲ思ハザルモノアラシ、見  
 ヲ堯舜ノ世、禮義ノ疎ナル、倫常ノ全カラサルヲ傳ニ曰ク  
 堯ハ舜ヲ試ミント欲シ、妻スニ二女ヲ以テスト、此時堯ハ  
 一天萬乘ノ天子ニシテ、舜ハ布衣ノ一人ナリ、之レニ女ヲ  
 娶スハ、君臣ノ禮ニアラズ、縱ヒ又妻スモ一女ヲ以テスベ  
 シ、二女ヲ以テスルハ夫婦ノ禮ニアラズ、且ツ象ノ舜ヲ殺  
 サントスルカ如キ、堯之ヲ知テ象ヲ罰セザルハ、何ゾヤ、初  
 メ堯ハ舜ノ爲メニ倉廩ヲ築キ、牛羊ヲ與フ、舜ヲ愛スルヲ  
 以テナリ、然ルニ象瞽瞍ト謀リ、舜ヲ殺サント欲シ、舜ヲシ  
 テ倉廩ニ上テ之ヲ塗ラシメ、下ヨリ火ヲ縱テ之ヲ焚ク、  
 后又舜ヲシテ井ヲ穿タシメ上ヨリ土ヲ下ダシ、以テ之ヲ  
 殺サントス、皆象ノ謀ル所ナリ、然シテ堯之ヲ見テ知ラザ  
 ルモノ、如シ、(若シ牧氏ノ如ク古史ヲ信セバ)是レ奈何シ  
 テ舜ヲ愛スルモノト云ハンヤ、是ヲ以テ之ヲ觀レバ、堯舜

ノ時タル野蠻未開ニシテ、禮義至テ疎ニ、制度未ダ備ハラ  
 ザルヤ、鏡ヲ懸ケ見ルヨリモ明ナリ、然ルニ氏ハ其人ヲ以  
 テ完全無瑕ノ聖人トシ、其法ヲ以テ萬世不易ノ定理トナ  
 スモ、誰レカ之ヲ信スルモノアラシ、故ニ余曰ク、堯舜ハ孔  
 教ノ偶像ナリ、又曰ク、堯舜ハ人爲ノ聖人ニシテ、天然ノ聖  
 人ニアラズト、牧氏ノ駁論ノ如キ、一モ以テ余カ意ヲ害ス  
 ル能ハズ、却テ余カ論據ヲ固フスルモノナリ、世人敢テ氏  
 ノ論ニ誑惑サル、ノ恐レナキヲ信ズト雖モ、氏余ニ明教  
 ヲ乞フノ一言アリ、之ヲ拒ムハ、余カ本意ニアラズ、乃チ爰  
 ニ再ヒ前論ノ意ヲ述テ、牧論者ノ蒙ヲ啓キ、併テ有識ノ明  
 斷ヲ仰グト云フ、

○有機化學ノ講究

理學博士 久原躬弦稿

夫レ有機化學ナルモノハ原ト動植物体中ニ於テ生産スル  
 處ノ物体即チ有機物ト稱スル化合物ノミニ付テ講究論述  
 スル所ノ一學科トナセリ蓋シ有機物ハ人爲ニ因テ之ヲ製  
 シ得サリシヨリ唯ニ動植物体中ニ在テ物ノ離合變化ヲ管  
 理スル處ノ一種奇異ナル活動力アリテ以テ產生スル者ト



想像セシニ是レ由ルナリ然ルニ漸々化學ノ進歩スルニ從  
 ヒ人爲ノ企及ス可カラサルモノト認定シタル物質モ元素  
 直接ノ化合或ハ無機物ノ變遷ニ由リテ以テ之ヲ製生スル  
 ナ得ルニ到リ一千八百二十八年ニ於テウユレル氏始テ尿  
 素ヲ製シ其後又シヤンヲ其元素ヨリ構製セシモノアリ  
 或ハ炭素ト水素ヲ直接ニ化合セシメテアセチリンヲ製シ  
 而シテアセチリンヨリ砂糖ノ醗釀ニ藉ルコアラザレハ發  
 生セサルモノト想像シタルアルコールヲ製シ又ハ蟻酸ヲ  
 造シ其他種々ノ有機物ヲ構製變遷スルニ到レリ而シテ最  
 モ近世ニ於テハハイエル氏ノ青藍構製又甚ダ新奇ナルハ  
 鳥糞、尿石等ノ主含有物タルギユアニンヨリ茶、コヒーノ  
 原質タルカフェエインヲ造ル等其數枚舉スルニ違アラヌ故  
 ニ今日ニ於テハ有機無機化學ノ境界全ク區別ナキカ如シ  
 依之現今ノ化學家ハ有機無機ノ別ナク之ヲ一ノ學科トナ  
 セリ然リ而シテ曩キニ一種特派ノモノトナシタル有機化  
 學ト稱スル學科ヲ炭素化合物化學(輒近刊行ノロスコ  
 ー氏及シヨールマル氏ノ化學書ニ因ルニ有機化學ヲ稱シ  
 テ水化炭素ノ分出體化學ト呼ヘリ是レ實ニ新稱ト云フヘ

シト稱ス而シテ炭素化合物ノ化學ノ全學科ニ關係アル  
 ハ猶ホ鐵化合物硫黃化合物等ノ化學全科ニ於ケルカ如ク  
 同一ニシテ決シテ炭素化合物ハ他ノ化合物ト異ナルコト  
 シ則チ此化合物モ亦他ノ化合物ト同一ノ化學的離合變化  
 ナ成シ又化學上同一ノ定律ニ從フ故ニ等シク化學上ノ  
 化合物ナリ此交互ノ關係ハ實ニ近世ニ於テ化學上穿究ノ  
 結果ニ付テ明瞭ナリ而シテ炭素化合物化學ハ化學全科ノ  
 唯一一部分ナリト雖モ其最モ肝要ノ部分ヲ占ムルカ故ニ  
 化學全科ニ係ル所ノ原理ヲ了解スルニハ炭素化合物化學  
 ナ充分ニ研究セサルヘカラス近世化學上ニ起リタル變遷  
 多クハ炭素化合物ニ係ル處ノ現狀ニ付テ研究上ノ結果ナ  
 リ而シテ今日化學上ニ全ク新タナル事實ノ更ニ増進ヲ來  
 セシハ蓋シ此研究上ノ結果ニ由ル故ニ化學カ現今ノ位置  
 ニ達シタル理由ノ如何ヲ問フニ至リテハ炭素化合物化學  
 ナ講究セサル人ニ在テハ決シテ之ニ答フルヲ能ハサルヘ  
 シ又現今化學上ニ於テ交換、同分異性、構成、及化合位ナル  
 コトハ最モ肝要ニシテ實ニ化學ノ基礎トモ云フヘキナリ即  
 チ交換、同分異性、構成、及化合位ノ理合及其交互ノ關係ヲ



充分ニ理會スルハ其歴史上ノ發達改進等ニ付キ精密ニ研究セサレハ又其歴史上ノ發達等ヲ熟知スル能ハサルモノトス

交換ノ理合ハ眞ニ炭素化合物穿究上ノ結果ヨリ其發明ヲ得タリ即チケーリコーサツク氏始テ蠟ガ鹽素ノ動作ニ遇フキハ水素ヲ放散シテ鹽素ヲ吸收交換スルニ其水素ノ一容量ヲ失ヘハ鹽素ノ一容量ヲ吸收スルヲ發見シタリ之ニ次テデユマ氏ハ鹽素ノテルペンチン油ニ右ト同一ノ動作ヲナスヲ認メ漸々其研究ヲ積テ終ニ水素ヲ含有スル諸有機物ハ鹽素ノ動作ニヨリテ同一ノ變化ヲ生スル一般ノ理由ヲ發見セリ爾後諸化學家カ此點ニ付テ潛心盡力シ以テ其究鑿ヲ施行セシカ就中特ニ千思萬考シテ終ニ某元素カ某物質ニ接觸スレハ某元素ヲ吐散シテ某元素ト交換スルノ確乎タル理由ヲ化學上ノ一大事實トナシタルハ全クロウラン、ウユレル及リービツグノ二氏カカニ是レ由ルナリ即チロウラン氏ハナプサリオンニ鹽素ノ動作ヲ試ミテ斯ノ如キ結果ヲ得リービツグ氏及ウユレル氏ハ巴旦杏油ノ究鑿ニリ其結果ヲ得タリ

又同分異性ニ付テ論スルキハ之ニ關スル處ノ諸事實ハ悉ク四五十年來諸化學家ノ炭素化合物ニ付テ致々汲々タル研究上ニ基クモノトス初メ化學家一般ニ思考シタルニ甲乙二個ノ化合物同一ノ元素ヲ同量ニ含有スルキハ此二物タルヤ同一ノ性質ヲ有セサルヲ得スト然レモリービツグ氏ハフユマリツク酸ハシヤン酸ト毫モ異ナラサル成分ヲ有スレモ其性質ニ至リテハ二物全ク異ナルヲ發見セリ次テアラデー氏又チレフイヤント瓦斯研究ノ際之ト同一ノ成分ヲ有スル第二物ヲ發見シタルニ其性質ハ全ク第一物ト異ナレリト此理合タル當時全ク了解シ難カリシカ化學ノ進歩スルニ從ヒ充分ノ説明ヲ下スニ至リ而シテ後同分異性ノ物質大ニ其數ヲ増加シタルノミナラス實ニ現今ニ於テハ日々新物体ノ増加スルヲ枚擧ニ違アラズ蓋シ是レ同分異性ノ理合發見ニヨリ推理シ以テ新物体ノ發明ヲ前言シ得ルニ至レハナリ從來化學研究上ノ一目的タルヤ同分異性ニ係ル現狀ニ付テ充分ノ説明ヲ下サンカ爲ニ充分ニ事實ヲ集ムルニアリタリ而シテ此事實ノ因テ以テ發起スルヤ殆ント皆ニ炭素化合物研究ノ結果ナリ(以下次號)



○古代ノ事物ノ容易ニ消滅セサル所以ヲ論ス

松 下 丈 吉

人類ノ社會ハ活動シテ止マズ故ニ之カ用ニ供スルノ事物モ亦變遷シテ息マス、サレハ一タヒ人生ノ實益ニ供シテ社會ノ運動ト其歩ヲ競フヲ能ハス終ニ世間ノ不用トナリタル事物ハ悉ク世間外ニ放棄セラル、モノナルカ曰ク否、社會ノ虛飾トナリテ再ヒ人心ヲ樂マシムルノ用ヲ爲スナリ

在昔ヲ追想シテ快樂ヲ覺ユルハ人ノ常情ニテ特ニ故郷ノ人ヲ見ルモノノ往日ヲ想像ノ誠ニ樂シキモノナリ社會モ此情ナキニ非ス既ニ世間ノ無用物ト爲リテ更ニ世用ニ益ナキモノモ容易ニ之ヲ棄ルヲチナサズ虛飾トシテ永ク世ニ保存スル者ナリ例之ハ城塞古跡ノ如キ世ニ實益アルカ爲ニ之ヲ存スルニ非ス甲冑、弓矢、大小刀ハ太平ノ世ニ於テ之ヲ用フルノ地ナシ就中大小刀ハ武士ノ裝飾トシテ久シク我邦人ノ腰間ニ横ハリ今又廣ク西洋ニ傳ハリテ將ニ彼ノ飾具トナラントス然リト雖モコレ其初メ大ニ實用ヲナシタル者ニシテ近代砲銃ノ發明ニ因テ唯其位置ヲ奪ハ

レタルモノ、ミ

未開ノ時ニ當テハ人ハ有形無形兩様ノ生存ヲ爲シ一旦鬼籍ニ入ルモ尙ホ亡者ノ魂魄ヲ食ツテ存スルモノト信セリ故ニ酋長ノ喪ニ際シテハ必ス人ヲ屠殺シテ之カ佛前ニ供ス古ヘメキシコノ僧侶ハ戰爭中一人ノ犠牲ヲモ得ルヲ能ハサルキハ祖神飢エタリトテ之ヲ國王ニ愁訴シ斯クテ若シ犠牲ヲ得レハ其心臟ヲ採テ先祖神ノ佛前ニ供シ餘ハ皆自カラ之ヲ食セシトナリ往古支那日本ニ於テ殉死ト唱ヘ故主ノ死ニ殉セシモ此野蠻ノ思想ニ源因セシヲ余カ喋々チ談ス今日佛前ニ膳ヲ備ヘ許多ノ食物ヲ供スルヲアルモ全ク亡者ヲ生アル者ト見做シタルナリ又古代摩擦ノ法ニ依テ火ヲ取リタルヲ知ント欲セハ更ニ史ニ據ルヲ要セ

ス今神佛ヘ燈明ヲ捧クルノ例ヲ見テ之ヲ知ルヲ得ベシ此等ハ或ハ虛飾トハ云ヒ難キカ如シト雖モ無用ノ事ヲ爲シテ人心ヲ樂マシムルノ一點ハ幾分カ虛飾ノ種子ヲ含蓄スト謂フベシ

文字ニ就テ之ヲ云ヘハ篆書梵字等虛飾ノ他ハ之ヲ使用スルヲアルナシ然レトモ此レ皆ト往昔ハ實用ニ使用シタル



者ニシテ近代ハ之ニ換フルノ便益ナル文字アルニ因テ特ニ虚飾ノミニ使用スルヲトハ爲リタルナリ其他古代ノ事物ノ今世ニ存在スル者誠ニ屈指ニ堪スト雖モ姑ク事實ヲ列擧スルヲ止メテ何故ニ古代ノ事物ノ斯マテ世間ニ許多ナル乎ノ理由ヲ論セント欲ス

第一 古今ノ事物ヲ比較スルニ在リ、凡ソ天下ノ事物ハ彼此相比較スルニ非サレハ物ノ物タル所以ノ性質ヲ具有スル能ハス老子ノ言ニ曰ク天下皆知美之爲美、斯惡已、皆知善之爲善、斯不善已、故有無相生、難易相成、長短相較、高下相傾、音聲相和、前後相隨ト事物ノ偏擧ス可サルヲ云フモノナリ寒ニ依テ始テ熱ヲ知り飢ニ因テ始テ飽ヲ知ル是人ノ情ナリ故ニ少時ヨリノ經驗ニ依テ已ニ其物ノ何タルヲ知ルト雖モ他ニ相比シテ之ヲ見ル時ハ一層ノ明瞭ヲ得ルカ如ク文明ノ進歩ニ依テ得タル器具ノ古代ノ器具ヨリ遙ニ便益ナルハ固ヨリ論ヲ俟スト雖モ互ニ相比シテ之ヲ見ルキハ又一層ノ明瞭ヲ得テ其間ニ一種奇異ノ快樂ヲ覺ユルナリ譬ヘハ琴ト尺八ト相調ヘ三味線ト提琴ト相和スルカ如ク今試ニ横刀ト銃筒トヲ取テ之ヲ比較シ如何ナル

感覺ヲ腦裡ニ生スルカヲ見ユ銃筒ノ便益ナルハ勿論古今戰爭ノ有様マテ思ヒ遣レテ其間一種ノ快樂ヲ覺ユルヲナラン即チ是レ古代ノ事物ニ戀々シテ容易ニ放擲スル能ハサル一ノ原因ナリ

第二 人心ノ容易ニ變化セサルニ在リ、コレ人類進化ノ遲緩ナルヲ會得スル者ハ必ス異說アルヘカラス身体ニ就テ之ヲ見ルモ間ニ動物ノ祖先ヨリ遺傳シテ今日ニ用ナキ者亦尠シトセス例之男子ノ乳房、鬚髯ノ如キ現ニ人身ニ存在シテ其一部ヲ占ムト雖モ更ニ今日ニ用ナキ者ナリ人身猶ホ斯ノ如ク豈ニ人心ノミ俄ニ變化スルノ理由アランヤ

ダーウ<sup>ハ</sup>ン氏カ說ニ據レハ吾人カ怒テ齒牙ヲ出シ笑テ顔面ニ皺襞ヲ爲スモ本ト祖先ノ遺傳ニシテ動物ニ在テハ大ニ實用ヲナシタル者ナリト云フ又兒童ノ好テ木ニ上リ徒ニ人ヲ嚙ムモ蓋シ亦動物ヨリ傳ヘ來リタル性質ナリ

思想ヲ保有スルヲハ既ニ本誌第五號ニ於テ之ヲ論セリ斯ノ如ク人心モ古代ノ思想ヲ傳來シ剩ヘ動物祖先ノ性質ヲモ繼續スル者トセハ今日ノ人心ハ過半往日ノ思想ヲ混和セリト謂ベシ然リト雖モ往日ノ思想果テ今日ノ人心中ニ存在スルモノトセハ必スヤ



其發洩ノ路ナカルヘカラス即チ古代ノ事物ヲ以テ其發漏  
ノ通路ト爲セリ今其證ヲ舉ンニ古代ノ事物ヲ維持スルノ  
場所ハ總シテ智力ヲ働スコ能ハス或ハ葬式婚姻ノ如キ人  
ノ情緒ヲ喚起シ其判斷力ヲ遲鈍ナラシムルノ場所ニ殊ニ  
多シトス是レ古代ノ思想ハ平常智力ニ制セラレテ容易ニ  
其出處ヲ見出スコ能ハサルモ如此機會ニ投シテ俄ニ發出  
スル者ニ非スヤ蓋シ亦古代ノ事物ノ容易ニ消滅セサルニ  
ノ原因ナリ

余輩ハ右ノ二原因ハ以テ古代ノ事物ヲ維持スルニ足レリ  
ト信ス然ラハ則チ凡ソ天下ノ事物ハ初メ人生ノ實益ニ供  
シ后變シテ虚飾ト爲リ人心ヲ樂マシムルノ用ヲ爲スナリ  
由是觀之世間全ク無用ノ事物ハ一モアラサルナリ、サレ  
ハ文明ノ進歩如何ニ速ナルモ又自然淘汰ノ篩子如何ニ密  
ナルモ容易ニ古代ノ事物ヲ盡ス能ハサル所以歟

○未完觀察ノ虚謬  
千頭清臣

余カ爰ニ論述セント欲スル所ノ題目ハ彌爾氏ノ稱スル未  
完觀察ノ虚謬ニシテ歸納虚謬ノ一ニ屬シ即チ一問題  
ノ理論ヲ定ムルニ當リ必要ナル事實ヲ忽略ニ附シ又ハ其

事實ニ附着スル所ノ サイカムスタンス 形情ヲ探究セサルコ由ツテ生ス

ル虚謬ナリ此二者ハ常ニ錯誤ヲ生スルノ原因トナレハ學  
者ニ於テ最モ注意セザルベカラズ今ヤ主意ヲ明白ナラシ

ムルカ爲メ先ツ第二ノ者ヨリ論起スベシ  
抑モ此ノ形情ヲ探ルセサルコ因ツテ生スルノ虚謬トハ集

積シタル事實ノ多少若シハ其適否ニ因テ生スル者ニア  
ラズ只其性質ノ不完全即事實ノ デスクリプション 描寫ヲ謬ルカ爲メニ

起ルモノナリ夫レ宇宙ノ間ニ發現スル所ノ顯象タル錯雜  
交互ニメ觀倪シ易カラス故ニ之ヲ觀察スルニハ獨リ其間

ニ起ル所ノ事實ニ注意スルノミナラス併セテ其事實ニ附  
着スル形情ヲ探究セサルヘカラス何トナレバ其形情ハ往

々事實ノ觀察ニ密着ノ關係ヲ有スルカ故ニ措テ之ヲ問ハ  
サルキハ其觀察ニ由ツテ定メタル理論ハ既ニ其根據ヲ謬

ルニ因リ全ク虚妄ノモノタルヤ明カナリ請フ左ニ一例ヲ  
舉ケテ之ヲ證センフウウラト氏ドクトル、パリス氏ノ言

ヲ引用シ曰クセント、キルダナル一城邑ノ市民ハ外國人  
ノ入港スル毎ニ必ス感冒スルコヲ信セリドクトル、シロ

ン、カンベル氏深ク之ヲ怪ミ百方其事實ヲ探究メ遂ニ其



病源ヲ以テ人躰ヨリ發散スル所ノ臭氣ニ歸シテ然ルニ  
 該港ノ地勢ハ東北ノ風ヲ待ツニ非ラサレバ船舶ノ進入ス  
 ルヲ得ストノ形情ヲ發見スルニ及ヒ其惡疫ノ行ハルハ  
 決シテ外國人ノ入港ニ歸因セスシテ全ク東北風即其地方  
 氣候ノ然ラシムルヲ證明スルニ至レリト此一例ニ就テ  
 モ事實ヲ觀察スルニ際シ併セテ其事實ニ附着スル所ノ形  
 情ヲ探究スルノ要務タルヲ知ルニ足ラン

以上ハ惟ダ讀者ノ注意ヲ呼起スカ爲メニ其端緒ヲ開クニ  
 過キス請フ是ヨリ本論ニ入り一問題ノ理論ヲ定ムルニ當  
 リ必用ナル事實ヲ忽略ニ附スルニ由テ生スル所ノ虛妄ヲ  
 詳論セン

凡ソ宇宙ノ顯象ヲ觀察スルニ際シ<sup>ホッケーブ</sup>正面ノ事實ニ注意シテ  
 反面ノ事實ヲ忽略ニスルハ人心ノ通癖ト云フヘシスベシ  
 カ一氏曰ク世人新タニ事實ヲ知覺シタルキハ直チニ其  
 事實ヲ以テ新タニ發生シタルモノト妄測スルノ僻アリ之  
 チ詳言スレバ偶マ心意ノ變化ヨリ嘗テ問ハサル所ノ事實  
 ニ注意スルニ及ヒ其事物ノ往時ヨリ増加シタルヲ感スル  
 ナリ例ヘバ新タニ脚ヲ傷ケタル者ハ世ニ跛者ノ多キニ驚

キ新タニ胃病ヲ患フル者ハ該病ノ屢ハノ發スルヲ感  
 スト至言ト云フ可シ夫ノ局量偏小ニシテ常ニ憂思ヲ懷ク  
 人ノ目ニハ世ニ失敗ヲ招ク者多ク豪邁活潑ノ人ハ世ニ事  
 業ヲ成就スルモノ、多キヲ見ルガ如キ亦此類ナリ其他夢  
 ノ符合ヲ唱ヘトノ奇驗ヲ稱シ彗星ヲ以テ凶徵トナシ祈禱  
 ヲ以テ神異ト爲ス者ハ皆正面ナル二三ノ事實ニ就テ信用  
 ナ爲シ其反面ノ事實ヲ忽略ニスル人心ノ通癖ニ因ツテ起  
 ル者ナリ夫ノ著明ナル大雜書三世相ノ如キ荒唐不稽ナル  
 書籍ノ全ク廢絶ニ至ラザル所以ノモノ亦實ニ以上ノ理由  
 ニ外ナラザルナリ

世ニ之レカ言ヲ爲スモノアリ曰ク天帝ハ七日ニシテ世界  
 創造ノ功ヲ竣ヘリ從ツテ又一週ヲ七日ト定ム世界ニ七不  
 思議アリ七惑星アリ羅馬ニ七王七丘アリ希臘ノ七賢人周  
 末ノ七國竹林ノ七賢人辨慶ノ七ツ道具賤ケ嶽ノ七本鎗七  
 ツ時ノ變化諸處ノ七不思議及ヒ七福人七草七癖七難等ア  
 リ故ニ七ノ數ニハ神秘アルモノ、如シト是レ亦前ニ述フ  
 所ノ虛謬ニ出ツルモノナリ若シ是等ノ例ニ因テ七ニ神秘  
 アリトセハ其神秘ノモノハ豈ニ獨リ七ノミニ限ランヤ試



ミニ九ノ數ニ就ヒテ之ヲ証セン九天九曜九族九々算正五  
 九ハ厄月ニシ井田ノ法ハ九井田ヲ同フス天皇氏ノ兄弟ハ  
 九人ニシ堯ニ九年ノ水アリ大禹ハ九州ヲ開ラキ九道ヲ通  
 シ九澤ヲ陂シ九山ヲ度ル及九鼎ヲ鑄ル列子ニ曰ク一變シ  
 テ七ト爲リ七變シテ九トナリ九變ハ窮ナリ又左氏吳都賦  
 ニ曰ク世陽九ニ際ス(註)ニ陽厄五陰厄四合セテ九ト爲ル  
 ト又九ヲ以テ除スルヲ得ヘキ年ニ於テ猶太羅馬其他國民  
 ノ困厄ニ陥リタルモノ多シ即チ紀元前七百二十年サルマ  
 チツサイノ爲メコイズレール人ノ壞滅セラレ同五百八十  
 五年チブカツトチサイセルサレムヲ征服シ同六十二年猶  
 太國羅馬附屬トナル同四百五十年アピヤスクラヂヤース  
 ノ亂起リ同二百十六年カノオノ激戰アリ同九十年及百五  
 十三年羅馬國ノ内亂アリ紀元後七十二年猶太人終ニタイ  
 タスノ爲メニ追放セラル同六十二年カチライト逆チ企ツ  
 同八十一年タイタス帝死ス同百十七年ツライシヤン帝死  
 ス又天變ノ例ヲ舉クレハ紀元後八十一年同百八十九年羅  
 馬ニ惡疫流行シ同五百五十八年全歐洲及ヒ亞細亞、亞弗  
 利加ノ大部ニ同上七百四十七年及千六百一十一年コンスタ

ンチノールニ同上四百八十五年及ヒ千三百六十八年英  
 國倫頓ニ惡疫大ニ流行シ紀元前百三十五年彗星現ハル七  
 十二日之ヲ彗星ノ史上ニ見ユル始トス紀元後千六百八十  
 年三月九日地球ノ軌道ニ甚ダ接近シタル彗星消失シ同  
 (千七百六十九年)地球ヲ距ル千八百萬英里ノ處ニ現ハル  
 千八百十八年エンケ彗星千八百七十二年ビイラー彗星現  
 ハル千八百八十一年九月彗星地球ノ軌道ヲ橫斷セリ斯ノ  
 如ク歷舉シ來レハ九ノ數ト雖ヒ亦大ニ神秘アルカ如シ然  
 レモ事ヲ論定スルニ當ツテ如此キ推論法ヲ以テ正當且ツ  
 無瑕ノモノト爲スヲ得ハ天下ニ何事カ證明シ得サル者ア  
 ランヤ故ニ偶々醫者ノ病者ヲ治療シ及ヒ藥ノ効驗アリシ  
 キハ直チコ之ヲ斷シ良醫ナリ良藥ナリト云ヒ然ラサレハ  
 反對ノ品評ヲ下ス可キカ如クナレモ適當ナル推論法ハ決  
 シ如此クナル可カラズ更ニ一例ヲ舉ゲテ之ヲ證明セン古  
 來英雄偉人ニシテ其狀貌ノ醜怪奇異ナルモノ多シ(一)ソ  
 ップ(小説家)及ガルバ(羅馬帝)ポーブ(英國ノ詩家)有名  
 ナルマラーノ四人ハ僕者ナリマリーチリヤス、マツサス、伊  
 國能辨ノ說教家)及セチツカ(羅馬哲學家)ノ二人ハ瘦者



ナリマルシリヤス、ブイシナス、フエパーダブレシス  
 及晏平仲ハ侏儒ナリエピクテータス（ストイック派ノ哲  
 學家）タレランド（有名ノ佛國政事家）及山本勘助ハ跛者  
 ナリ左丘明李克用伊達政宗平忠盛塙檢校蟬丸チモルオン  
 （有名ナルコリンズノ大將兼政務家）ハニバル（有名ノ軍  
 士）ムリウス（テューニス）王（ジョン）（ボヒミヤ王）ホーマー  
 （有名ノ詩家）ノ數人ハ獨眼若シクハ盲者ナリ故ニ醜怪奇  
 異ハ英雄偉人ト爲ルノ原由ナリト謂ハ、何人ト雖モ容易  
 ニ之ヲ首肯セサル可シ以上反覆評論シタルカ如ク正面ノ  
 事實ノミチ擧ケテ直チニ斷案ヲ下ス者ノ虛謬タルヤ此ノ  
 如ク明白ナルニモ拘ハラス尙ホ世人ノ之ニ從事ノ自カラ  
 疑ハザルモノハ要スルサイエンテック、カチチユア科學修練ノ未ダ洽チカラス  
 シテ推論力ノ發達セサル證左ナリ頃日余某人ニ邂逅シ談  
 偶マ俗事ニ及フ其人眞面目ニ説キ出ダシテ曰ク余無盡會  
 ニ臨ム毎ニ必ス腰間ニ一箇ノ杓子ヲ帶フト余其ノ何ノ爲  
 メナルカラ問フ曰ク某々ノ數人ハ皆ナ此ノ秘法ニ因ツテ  
 當籤ヲ得タリ余亦其籤ニ倣フノミト此人ヤ全ク痴漢ニ非  
 ラス而シテ自ラ信スル此ノ如シ亦以テ其ノ虛謬ノ極端ニ

達スルノ一證ト爲スヘシ  
 筆ヲ擱クニ臨ンテサー、ジョン、ハッシエル氏ノ言ヲ假リ以  
 テ此篇ヲ結ハント欲ス氏曰ク世ニ天氣ノ晴雨ヲ豫知スル  
 チ必要ト爲ス人アラシ其人若シ天色ノ變化ニ由ツテ晴雨  
 チトスルノ俗諺ヲ聞キ且ツ自ラ實驗シテ二三ノ之ニ符合  
 スル者アルキハ忽チ固信シテ疑ハサルヘシ余ハ是等ノ人  
 ニ向ツテ告ケン宜シク先ツ一箇ノ簿冊ヲ備ヘ平心慮氣以  
 テ晴雨ノ前因ト認メタル事實及ヒ其滴應背違又ハ應違ノ  
 不愜ナル者ヲ詳記シ一百以上ノ實例ヲ蒐集シタルノ後ニ  
 於テ應違ノ二者ヲ對照シ多數ノ者ニ就ヒテ之ヲ判定スヘ  
 シ而シテ此多數ハ少數及ヒ不愜ナル者ニ對シ著シク超過  
 センコトヲ要ス斯ノ如ク事實ノ觀察ヲ精密ニシテ屢々之ヲ  
 實驗ニ徵シ始メテ世人カ豫定ノ齟齬スルコトニ注意セズ偶  
 然ノ應中ヲ以テ確實ナリト爲ス迷妄ヲ解スルヲ得ヘキナ  
 リト  
 編者云フ此篇ハ最初本紙ニ掲載スルノ目的ヲ以テ起草  
 シタルモノニアラサレハ獨リ歸納法ノ概畧ヲ述フルニ  
 至ラサルノミナラス其一部タル虛謬全體タモ通論スル



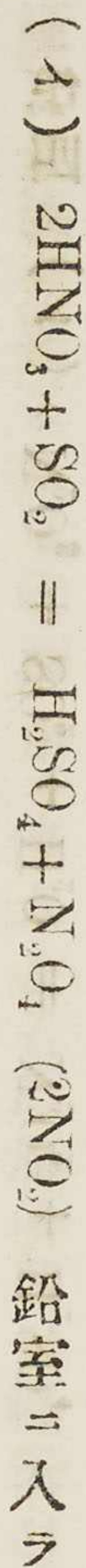
ニ暇アラス直チニ本論ニ入りシカ故ニ往々論意周備チ  
欲キ義理明暢ナラサル所アリ看官請フ之ヲ諒セヨ

批 評

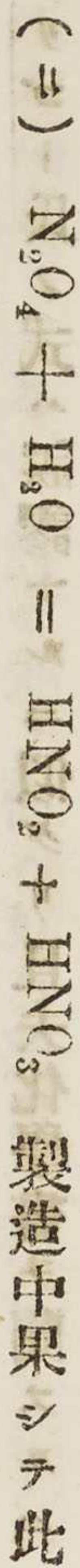
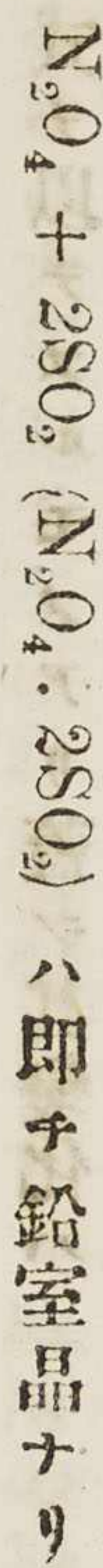
○硫酸鉛室内ノ化學變化ヲ論ス 渡邊鉄次郎

抑モ硫酸製造中鉛室内ニ於テ發起スル所ノ化學變化ヲ論  
スルニ一説アリ一ツハ則チフェリゴ一氏ノ説ニシテ又一  
ツハウエーベル氏ノ説是レナリ兩氏ノ此變化ヲ表記スル  
左式ノ如シ

第一 フェリゴ一氏ノ式



サル前ニ發成スルモノナリ



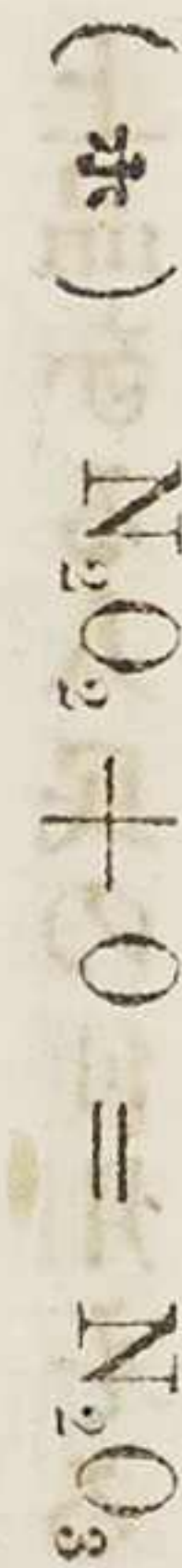
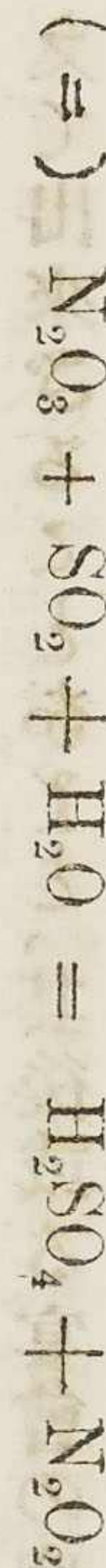
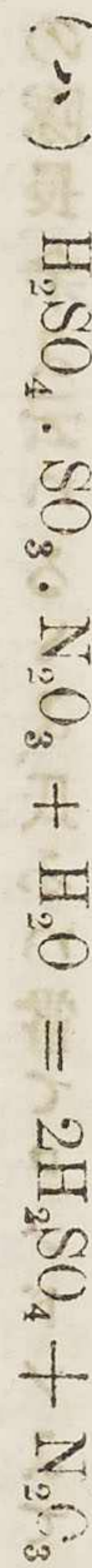
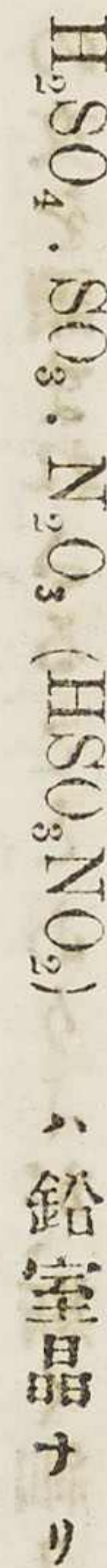
ノ如キ變化ノ行ハルヤ否亦疑チ容ル可キモノアリ



第二 ウエーベル氏ノ式



シ鉛室外ニ起ルモノナリ



余ノ視ル所ニ依レバウエーベル氏ノ式最モ眞ニ近キカ如

シ請フ其証ヲ舉ケン曾テ諸化學士ハフェリゴ一氏ノ説ヲ

容レ鉛室品ニ附スルニ  $\text{N}_2\text{O}_4 \cdot 2\text{SO}_2$  ノ符號ヲ以テセリト

雖ニ爾來ウエーベル、ウインシラル、スミツス及其他二三

ノ化學士ハ鉛室品ヲ分析シテ其符號ハ實ニ  $\text{H}_2\text{SO}_4 \cdot \text{SO}_2 \cdot$



出セリ是レ其一証ナリ

スミツス氏ハ硫酸ノ所在ニ於テ第二式(ロ)ノ變化ノ太々輕

速ナルヲ查出セリ是レ其二ナリ

二酸化窒素ハ硫酸ノ所在ニ於テ大氣中ノ酸素ヲ吸取シ三



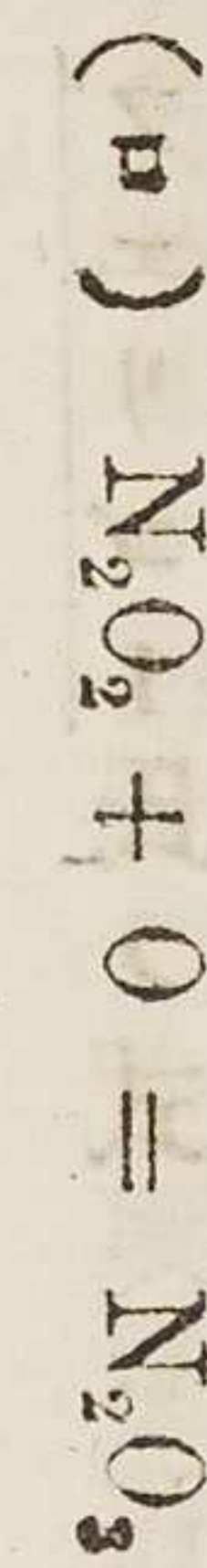
酸化窒素ニ變化シ敢テ過度ノ酸化ヲ爲サルヲ即チ實驗ノ

成績ニシテ是レ其三ナリ以上ノ三証ヲ以テ推スルハフエ

リゴー氏ノ式ハ誤謬ナルニ似タリ且夫化學書ヲ閱スルニ

或ハ硫酸製造ノ反應ヲ記スルニ第三式ヲ以テシ或ハ第四

式ヲ以テスルモノアリ蓋シ其變化ハ



頗ル複雑ニシテ此ノ如ク單簡ナルモノニ非ス要スルニ此

レ一ツハ以テプエリゴー氏ノ式ノ首尾ヲ削捨シ一ツハ以

テウエーベル氏ノ式ノ要點ヲ適採シタルモノニ過キサル

ナリ抑モ硝酸ハ二酸化硫素ニ感シ三酸化及ヒ四酸化窒素

ヲ放散スルカ故ニ硫酸製造ノ創ニ當リテハ蓋シ第三第

四式イノ變化相共ニ發成スルナラン然レモ前條ニ述ヘタ

ル如ク硫酸ノ所在ニ於テ二酸化窒素ハ四酸化窒素ト爲ル

能ハサルガ故ニ遂ニ第四式ヲ以テ穩當トセザルベカラ

ス而シテ三酸化窒素ハ更ニ新造ノ二酸化硫素ニ感動シ其變

化ヲ旋轉反復スルナリ

雜錄

○耶蘇辨惑序

文學部長外山正一

余先年米國ニ遊學せる時横文にてロウマン、カソリツキ  
宗の惡口を云へる一篇の文章を草せることありき、而て  
竊ニ以爲く外國人の分際にて、どうあつてこうあつて斯く惡  
口と云ふんこととの出來たるは、全く英語の元來惡口好き  
の人民の國語にて、惡口と云ふは至て便利ある性質の  
故より、中々我が人民の如く謹直にして惡口嫌の最と  
上品ある人民の使用する言語にては、惡口と云ふこと絶  
えて出來ざることありき、其後或る宴會の席にて某新聞  
の隊長、余に云ひ、君の嘗てロンドンにて、余の斯  
の文を讀まれしることありしが、斯く細く惡口を云ひま  
はむこと、本邦語にては所詮出來ざることあらんと、其  
時の余も又然かく思へり、而て爾來彼の隊長先生の新聞  
紙を讀む毎も、未だ曾て其惡口の巧あるに感ぜざるはあ  
し、是に於て大に悟る所あり、先日宴會の席に於て隊長の



余も語られしも、蓋し亦惡口の最も巧なるものなりきか  
 と、本邦人も斯る惡口の名人のあるかよ、本邦の言  
 語と雖も全く惡口不適當なるものありぬこと明け  
 し、ろこで余も隊長先生お倣ひ、何れ好き種ありと  
 一番思ふ存分惡口を云ふてみると思ひ、何れ好き種  
 ころあれと、待詫びられども別は是ぞと云ふ種もあし、随分  
 きよあつねども、何れも至くけんのかあるもの計り、惡口  
 の政府の惡口程易きものあらぬこと、近來碌々筆も  
 廻らぬ者迄で、猫も杓子も矢鱈は政府の惡口と、出懸  
 るを見ても知らるゝあらん併し天下の事何事も時と場  
 所と依て異なるものあり、他人よと政府の惡口程云ひ  
 易きものあり、官吏も取りては政府の惡口程云ひ難  
 きもこれあらぬなり、云へを去年の暮の通り、到底目算が  
 あるの大馬鹿でなければ、官吏よと政府の惡口云ひ難  
 き等あり、余の如きと差當り別は目算もあし、又其れ程  
 の大馬鹿でもなし、因て外は何れ好き惡口の種もあつと、  
 頻々考ふも何れ分あし、代言先生の惡口を云んか、名譽  
 回復と出懸られ、とどのつまり代言人を頼み、阿漕な金を

取られねばならぬ、新聞記者の惡口を云とんか、其返報も  
 の雜録とか漫言とか雜報とか云ふ恐敷い恐怖い奴で、無  
 きこと迄を有つと様よ、おつおやらることもあしと保  
 し難し、醫者の惡口を云へば、コレヲよあつと時よ忽地困  
 る、自分の惡口と云へば人よ怒られる氣遣とあらぬども、  
 肝腎の顯が干上る、此等の事と如何程惡口の好き種であ  
 りても、先つたよ手よ出せぬ、然るよ茲よ唯一ッ惡口の最  
 ども好き種こそあれ、耶蘇宗徒則ち是あり、夫を政府なり  
 代言人あり新聞記者あり、若し之が惡口を云ふ時の、必  
 怒らざるのなし、政府の外に必は犬の糞で敵と出懸けぬ  
 の稀あり、特り耶蘇宗徒に至りては斯る憂い更おなま、耶  
 蘇宗徒よ限り、如何程之を惡様よ云ふも少しも惡まるゝ  
 氣遣のなき而已ならず、却て爲よ愛せられんとするあり、  
 耶蘇教の本尊が曾て人よ爾聞有言爾必愛爾隣一憾爾敵一  
 惟我語爾敵爾者愛之詛爾者祝之憾爾者善視之虐遇  
 爾迫害爾者爲之祈禱。如是則可爲爾父在天者之子と  
 云へることありと聞けるの誤謬り、實よさることのある



夫らば如何程耶蘇の宗教を信する者の惡口を、利くも惡  
 まき誼ひるゝことのかくして愛さるゝ、譯ある故ふ、世の  
 中よ是程妙なことを、二千年足らすの間、彼の宗の人  
 の舉動を、史よ微一能く視るよ彼の宗の人の教よ斯ると  
 ありとい露も見えぬあり、されば余い今彼の、人達の惡口  
 を利きく、之を試さんと、もる也此の惡口の爲よ彼の、人達  
 益々余を愛し、益々余と親を結むれんとせらるよ於てい  
 余の満足之よ過ぐるものあらざるあり、口よ人を誼ふべ  
 からせと云ひ、實際人を誼ふ者、口よ敵を愛せと教ふるも  
 實際兄弟牆よ鬩く者、斯る族の余れ最も感服せざる所か  
 り、斯る族の耶蘇宗人の中よ甚多き、余の最も彼の宗  
 旨の爲よ惜む所あり、嗚呼耶蘇宗人よ口よ爾の宗の他の  
 宗よ優ることを喋々びるを止めて、爾の舉動よ由て之を  
 人よ示せ爾の舉動よして眞よ世人をして、之よ感服せし  
 むる如き者よらしめんよ、爾の宗教よ歸化せん者多く  
 あらんこと敢て疑ふべうらざるあり、耶蘇曰く「由果而識  
 樹矣」爾の行の果あり、爾の宗教の樹あり、人をして果の善

あるを知らしめむ樹の善あるを知らしむるの又易き而已  
 一爾偽善者乎先出、梁木於己目、則爾可、明見以出物屑於爾  
 兄弟之目矣、同じ耶蘇教を奉ずる徒が同じ耶蘇教を擴張  
 せん爲よ設けたる、新聞雜誌に記者同士の不和の如き、  
 該宗人の最も耻づべきことなり、年々幾萬圓とも知れ  
 ぬ金を費し乍、斯る事をかゝ居る位で、果の善あること  
 を人よ知らしむること、甚よ覺束あり、其れが出来ざる  
 日よ、樹の善あることを如何程喋くも徒よ口よ  
 風をひかするよ過ぎず、憐むべきの耶蘇の犬死あり  
 余の胸膈固よ狭くと雖も、耶蘇教を容るゝの地なきよ  
 ならず、余の學識淺薄ありと雖も、二千年足らすの間億萬  
 人の信仰せるものよ必ず取るべきものあらんと知らさ  
 るよあらず、余固より我邦人の耶蘇教を信せんとを憂ふ  
 る者よあらず、特よ之を信する者其信薄きと憂ふる也、佛  
 よまき孔子よまれ耶蘇よまれ眞よ之と信じ、其説く道よ  
 能く隨ふ者の、余の常よ見るを歡ふ所なり、然るよ近來漢  
 學者流の有様を見るよ、其最も經學よ精しき者と雖も  
 主とする所の其精よ誇るよ過ぎず之よ精く其精きよ由て



心を正し、身を脩め、家を齊へ、國と治めんとする者の如き  
 の最も稀あり、如何は孔子の道も明るるも、之を實際行  
 んとせざる者の如き、眞の其道を信する者ありとい云  
 ひ難し、此れは是れ所謂の論語讀の論語知らず、斯の如き  
 儒者の之と鸚鵡儒者と云ふべし、鸚鵡儒者の社會の品行を  
 改良せん爲ふ、頼むべき者もあら、蓋し今日も在りては、  
 其道と説く者も、之を聽く者も、其の其道を實際行いんと  
 する如き者も、いあらざして、特ふ其道の如何を知らば則  
 以て足れりとする者も、笑止の至なり、又顧て佛僧社  
 會の有様を見るに、實は言語同斷ある景状あり、夫れ佛僧  
 する者、身コロモ又衣を纏ひ、肩コロモ又袈裟を掛け、手コロモ又數珠を爪繰れ  
 る所の、僧の則僧をれども、其行を視其心を察するも、邪界  
 より人を救脱して、極樂往生をさせん杯とい、中ノノ思も  
 付かぬこととて、自ら邪界の底は墮落し、身より發れる煩  
 惱の繩とて縛り、疑の闇路は迷ふ心より、彌陀を頼みて往  
 生を、願ふ心の露もなく、自身に現は罪惡の生死流浪の凡  
 者とて、貪欲の心の日ノノ彌勝り、供奉貪の心の強く、威  
 儀よめで、人の財をむさばりて、我が寶をばをしむあり、顯

色貪を制し兼ね、遊女狂ひや、妾と蓄き、酒食は耽ける不身  
 持の、浮屠の教の衰へし證據とこそい云ふへけれ、此風俗  
 を一洗し、佛教の衰へたるを回復し、世人の品行を改良さ  
 さんとい、蓋しルソー若くハロヨラの如き豪傑の僧徒  
 中は現出せんことを肝要なれ、今日の所にては其れも  
 至て覺束あり、此時は乘じ他の宗教の侵入せんこと、最  
 も容易にして、且つ今日の所にては浮屠の道も孔孟の道  
 も、眞の之を信し此道も由て人と救いんとする如き人物  
 至て乏しきが故も、己が宗教を信すること眞實にして、之  
 を以て人を救いん爲ふの生命を省そ、財産を惜まざ、口で  
 道と説かんよりい、行よて之を示さんとする如き者、多き  
 宗教の我邦に入り來らんこと何より願ひしきこととされ  
 ば、耶穌教もても、回々教もても、其任も堪ふる者でさへあ  
 れば、何宗教もても、厭ふこと固よりあらねとも、回々教  
 も耶穌教も既も佛教同様の衰頽は就かんとするの恐わ  
 り、されば耶穌宗の如き、年々幾萬圓共知れぬ金を費し、  
 宣教師と萬邦へ派遣し、或は會堂を建てる等のこと、いそ  
 れども、肝腎の傳教師先生は、錢取仕事も、宗教を、翫ぶ者多



く眞、救主の言と信じて、人を救はんとしてゐる如き者、寡きを如何せん、耶蘇云へるあり「爾中欲爲大者當爲爾役」。又爾中欲爲首者當爲爾僕。即如人子至非以役人乃役於人。且捨其生爲衆贖也」と傳教師中能く此言を守る者幾人ありや、傳教の道の煉火石堂中、於て已ぶ宗教の善あるを誇り、或は雜誌を著して仲間同士の悪口を云ふも止るか、煉火石堂や新聞雜誌を待て、初て傳教の道を得たりとせば耶蘇や、日蓮マホメツト、ポール、サビエー、ハ如何して傳教せるぞ、煉火石堂たり、新聞雜誌たり、固より傳教の爲も有用あるものあるべし、然れども傳教の道の尙ほ其他もあくんばあるべからざるあり、今の教師たる者此を見ある者至て鮮し、豈難せざるべけんや

余の本論を著そや固より耶蘇教に對し、寸毫の惡意あるまわらず、余の此序を作るや固より浮屠孔孟の道を害せん爲まわらず、特り耶蘇の教を奉むる者孔孟の道を説く者其信薄きを憂ふる而已、耶蘇信仰の人達よ爾も諂諛する者と以て特り爾の友とせざる勿れ、爾の非を擧ぐる者を以て悉く仇とせざる勿れ

井上巽軒曰、按筆一呼、衆理奔命、如引敵陷八陣中、妙、又曰、耶蘇之教、雖有可取者、而亦不免奇怪荒誕之詆、然世之溝猶督儒、或不知其所非、而妄信焉、是以我外山先生著書以排攘之、蓋亦出于老婆心歟、

○山家秋來

久米幹文

山かけのいゝもる清水を、むとびあけて、思ふやう、この比の、氷室のみつきやつかうまつらん、やんことなきわたりの、さも涼しうかいそふめど、處せき都人のいかゞ堪かたからん、何事も世をおくれて、たらはせなから、いみじきあつさともよそよそむあるの、のかき一山のかひありや、曆といふものもあけれの、いとおほつかあけれと、垣根の小草の花もさくとみれの、今年も半の過ぬらんかし、山靜お日長うしていとぬふだけれの、北窓の下よそひふして、肱を枕とせるともあく、かそかおとあふ聲の、はしめい清く涼しきも、やあそれよかあしけくきこえて、はていおどろく、う、家さへゆるとおほへ、か、うちおどろきてみるよ、峯の夕日またかまかみ残り、庭の笹原うちなひきて、西の風俄よふきあれたり、松の響灘の音さへ添



ぬれぬ、そゝる寒きまでおろえて、苔の衣をもかさぬつへ  
うなん、いつの年もめふこを見えぬ、秋來ぬとい、かのそり  
く物のたりひよしらるゝと、いとさのやかかる年なりり  
ど、

山里のそゝるしきを都人の袖の秋風いかみたらけん  
このころの夢のたゝちや涼しからんかし、

○刺客を詠する詩

大學のしかせたちのものせられさる新體詩抄の

體よ倣ふ 八門 奇 者(郵送)

天を仰けべいと廣し地見またすも亦廣しその中よ住む人  
よまて、などの心の狭かりし。狭き心の一筋よ此の人有り  
バ世の爲よゆゑまき事や起らんと、思ひわびけん朝夕よ。  
やがて病よかこつけて、勉めまわざも打棄て、時の花散る春  
風の、あこやの里よ歸り來て。それと言えぬを父母よ。是ぞ  
此の世の御別よ。厚き惠も報い得ず、先たつ罪の免してよ。  
うららいつから友がさよ。告んとすまご告げがてよ。おもひ  
煩ひかき残す、心の盡きず執事筆よ。今日春雨のふる里も。  
いやたら出る旅ころも。ころも經ずして稻葉山ふもとよ着

きぬ嬉しくも。識る人としてをぶら川おもふかたきあわ  
ふ瀬をバ尋ね問ふべきよしもが取とく揮てまゝこの白  
刃。憎さも憎しものかたき。非ぬ望みを胸あき。下ある民  
をそゝのかゝ上の掟を言ひあをさ。一上を崇むる人をしも。  
諛ふものと謗れども下よへつらひ民よこびねぢぢとてた  
る彼等ども。佐賀よ起りし箭さるびも。長門よ降りし火の  
雨も。薩摩の瀬戸よ幾千々の人を沈めし浪風も。うさてく  
とあれど君がため。高麗もろこしも討鎮め。國のみいつを振  
えんと、思ふ餘りの其の結局。憎むべしとも覺ゆれど、思ひ  
かへせば可憐ひと。是よ引きかへ彼れともと、世の正道を亂  
さんと。彼の蠢々き佛蘭西の血の波たち。禍津世の首斬  
り臺よ國王をひきとえたり。當時の。いと淺ままよくふる  
まへふ。あどよ心やとまりぬる口をひら々バ鮮血もて世を  
洗えんと叫ぶかる。かゝる勢いつのまをバ危かままし大  
君のいで大君の御爲よ、斫り斃してん彼の人。さのさり  
あがら彼の人。誠まかくも思へるか。附き従へるにせもの  
、妄よしりのいふかるか。とよもかくよも彼の人。心の  
底を知らんと。願ひかかひてまのあさりねんせつ聞しる



の時の。「心の中いりあり。今いそこしも宥さきじ。隠し  
 持ちたるし首袖の裏よて抜き放し。」待つとひまひたないさふよ彼の  
 人の神ひまひたなあらぬ身は思ひねむ。鼻高くかよしづくと。歸る跡  
 より飛びつ々。何故ありてうくすると。言いせも果てず  
 何故と問ふの愚よ汝こそ。今將來の國賊と。閃く刃ほとり  
 える。血はほも赤き心ある。此よくすのまらとの真心の貫さざる  
 ど怨とある。よしやうらみい遺るともなほさ其の名の世  
 の人もふみよしるして音高く。語りつきなん千世までも。  
 さきど敵と見ひがめ。其の紳士の世おためしむくささま  
 であつあつとき君お忠なることろざえ。國おつくせること  
 ろざし。大學まめのうまひ

○觀櫻門蹀血圖引二百二十韻 内田周平 郵送

綱弛典午日蕩佚。誰道驩虞四海一。久矣王謝璧尾拂。忘却雨沐  
 與風櫛。任他海外音塵室。纒隔一葦不肯悉。衰弊只管彌縫密。煥  
 爛聊且謳恬謔。居治忘亂寧終吉。知彼知己要洞察。幾多買馬起  
 抽筆。一蹶不免陷請室。蜻洲東去大洋濶。紫髯綠眼栖突厥。城皆  
 有脚火輪掣。萬里洪濤一霎軋。聞道大瀛有仙窟。瑞穗細戈饒寶  
 物。好向浦安凌溟渤。壓破擬排玉牆櫺。相摸海關俄橫溢。羽檄旁

午戒局鑄二雙鷄。首舉朝。惶急恰似魚逢獺。征夷府固秉節鉞。  
 唯斷乃成何狼跋。其如坐食氣不實。遞爾膽落信虛喝。好意若果  
 欲親暱。暴行詎敢用威怵。此膝高宗勿卑屈。彼背中行須鞭撻。咄  
 哉樽俎論世閥。復遣儒冠往辨詰。孫通只解列綿繆。言屈張儀縱  
 橫術。鼎折鍊覆機宜失。果然大堤壤蟻穴。跳擲難奈山猴黠。奔踞  
 放教野馬鬪。八洲豈無一俊鶻。誰將東藩枉縲紲。雖則縲紲戀魏  
 闕。翎可折兮志弗折。元是扶桑翺翔質。宏謀遠識無儔匹。勤儉夙  
 夜若獎率。蹇々匪躬靡暇逸。毀淫祠而廢妖佛。撫蒼生而巡農畷。  
 艦砲造來邑無刺。干戈講得師有律。知禮吳子見季札。戴主齊相  
 聞召忽。忠武那讓漢諸葛。明哲或似唐仁傑。豈圖懷玉翻遭別。敢  
 為傷害何蛇蝎。千里雄志陡然訕。駒籠邸裡長墊閉。欲爭獻納折  
 驕羯。此時庸可少富弼。宋廷何人粹薦拔。一朝喬遷萬目刮。不料  
 柳營有赤魃。腹裏藏劍口含蜜。吐出毒焰宛焚蕪。吞取清流如飢  
 渴。奚擇布韋與紳笏。一網打盡直囊括。株連蔓引東林讞。五十餘  
 人圍圍噫。連枝三槐先壞裂。隼雛從茲羽翼鍛。城狐白日驕林樾。  
 鬪茸滿庭無人制。恨不鍊索結讒舌。常陽舊廬乞骸骨。寶刀難染  
 洋夷血。俾箇英雄賦白髮。弘道之館不徒設。養得俊父士林蔚。主  
 辱臣死豈苟活。穎脫荆軻十有七。時是亢龍益猖獗。太阿倒持觸



輒殺。清廟音絕雲和瑟。荏城風物極抑鬱。由來輿論不可遏。無端  
 誹謗滿蒼泐。南方之劍安得乞。躊躇蓬屋日蹙頹。看來烈士立談  
 決。斬奸好提百鍊鍊。品江驛頭酌酒訣。宕陵祠前刺血歃。安政庚  
 申春三月。維初三日上除節。皇天毋乃眷忠烈。艷陽翻是飛玉屑。  
 滿城一白。讎欲沒。郭門百步認髣髴。戴朱笠兮被黃襪。天花紛紛  
 不可刷。看他昇轎頻搖兀。雲母窓中閃紫絨。刀戟前後擁百卒。堪  
 凍忍寒故他々。前驅倏見騎笠苗。闌訴數人便唐突。多罪下奴遮  
 警驛。藉威徒隸幾噴叱。脚跟無改仍蹙蹙。口角不屈轉勃窣。瞥見  
 霜刃脫腰被。衛士赴救恠咄々。機矣一齊箠笠撥。蹴雪掉刀斗膽  
 勃。何來喝聲衆魄奪。噩然失脚泥滑澀。顛沛抵死遽回斡。劍電閃  
 爍響。憂々徧地白氈鮮血鱗。模糊染出猩紅纈。斬人不異芟瓜厭  
 任渠。髑髏縱橫凸。輿丁踣矣輿與跌。忽地脫輟便飢飢。誰哉三尺  
 拔衆出。姓曰有村生西薩。薩音孽。牙口噴沫。犀可刺兮蛟可截。頭  
 顛倉卒安得脫。愕眙已見利鋒抉。曳出鬢髮一擊切。衆口齊呼宿  
 志達。途人來觀鬪方歇。認取血痕尙驚怛。廁養亦憎茲老辣。殘骸  
 委地有誰掇。仇首從來重萬鎰。隻手今朝容易挈。憐殺豫子擊衣  
 袂。莞爾拭刀咸內鞞。從容詣闕捧書曰。周衰嫠婦緯不恤。何況臣  
 等食恩秩。微軀本自甘炭漆。真成率土皇室轄。國體徹頭不容翫。

何物大老敢巡悖。紫泥之詔直塗抹。蒼皇拜迎視屈膝。既聽登營  
 進。又謁龍種牢籠混蚊蝨。醜類廷饗廁叔侄。干兮城兮皆屏黜。柱  
 也石也盡擯討。懷忠抱義斃桎梏。何限冤魂定飄惚。人亡邦瘁元  
 氣竭。坐看運脈日膠轕。恠他滿廷舉助桀。伴食每觀散樂僧。臣等  
 扼腕非一日。罪逆滔天曷時輟。願中有物無由啞。滿臆杞憂向誰  
 泄。神明照得寸衷微。誅去國蠹臣事畢。猖狂非敢犯幕闥。屏營伏  
 請嬰斧鑕。陳得懇惻兼凜冽。頓令頑懦志廉潔。氣高筑峯勢崔嵬。  
 名芳櫻田香薜。快矣秦檜一劍批。迂哉胡銓千言述。紫宸誅鹿  
 爭甲乙。博沙擊龍難優劣。後來坂門顛肥駮。當途復踏覆車轍。我  
 頭可斷腹可割。取義士衆年不絕。津水波山爭竭蹶。馬關麈灣何  
 快疾。金川斬虜揮刀鉞。銀峯唱義發箭箠。伐防門而不可伐。越伏  
 水而不可越。剝徃陽復天地豁。傲々再睹赤日揭。一從海宇戰氛  
 滅。萬古金甌曾不缺。君王獻聖臣賢哲。贊揚文化民抃悅。却幸漁  
 人未至猾。多年徒觀爭蚌鷓。更喜海內魚活潑。免得鯨鯢頻凌蔑。  
 忽驚世態易更迭。又愁士氣漸萎蕩。狡慧稱才質直拙。不尙節操  
 尙權譎。鬚眉丈夫轉軟滑。巾櫛婦女趨淫褻。艷篇綺冊爭先綴。忠  
 臣烈士不復說。賴我俠骨尙健倔。義人報讎時緝閱。拜遺物又掃  
 殘碣。追想當年感淚咽。今對此圖故態發。蒿地釀來滿腔熱。慷慨



不覺叙頓末。樽前擊節歌一闕。君不見元祿壬午同盟結。森然四十七士列。二百歲隔朝夜別。清烈一樣滿邸雪。

井上巽軒曰。近世作詩者。學淺識卑。耽溺酒色。不能賦雄大之篇。以裨補名教。要皆小家數。今讀此大作。陰韻寬押。至二百二十字之多。而鼓舞夫人志氣。亦不慙々。實近世之所罕見。余欲集此等之大作。大舉以一掃世之弊風。

秋夜病中書懷

秋氣襲客居。萬籟夜交至。庭柳與池蒲。慘澹一鷗墜。獨坐擁故袍。淒々無限思。今歲復過中。光景奈飛馳。滯京已七年。弱冠又加四。散微無寸功。孤負平生志。秋冷動宿痾。喉音頓變異。疹氣入體膚。延綿叵期治。燈前不披篇。牀頭親藥餌。前途萬里長。驚駘幾顛顛。老親在家鄉。待我成材器。每聞落葉聲。衣襟濕涕淚。如何五尺軀。常爲二豎累。胸中存雄圖。局促不如意。唧々空階蛩。枕上耿難寐。消盡藥爐烟。殘釘青一穗。

井上巽軒曰。真情真詩。自勝使人翫讀不已。

寄書

○人口概論 上篇

添田壽一

緒言

彼ノ人口論ノ如キハ、實ニ至重至大ノ問題ニシテ、世能テ改良シ公衆ノ幸福ヲ増進セシメテ望ム率先者ノ講究セシムハアルヘカラサルノ要件ナリ、是ヲ以テ歐米ニテハ經濟ノ諸名家大ニ此ニ注意シ、其論既ニ盛大ナル形勢ヲ呈シ、現ニ人口論戰場ニケレテ派マルサス派ノ兩敵アリ、一ハ人口ノ繁殖ヲ自然ノ力ニ放托シテ可ナリト唱ヘ、一ハ繁殖ヲ今日ニ適宜ナル手段ヲ用ヒテ防禦セズンハ人類悉ク向來ニ至リテ凍餓斃死スルノ外ナシト論辨シ、互ニ一方ニ偏シテ旗ヲ翻シ、數年來ノ爭鬪何時一決スヘキトモ覺エサルナリ、今假リニ兩敵ノ中、孰レカ正ニシテ何レカ非ナルヤ或ハ亦兩方共ニ非ナラサルヤヲ評判スルヲ決シテ無用ナラサルベケレハ、先ツマルサス派ノ非ヲ掲ケテ、其中正ヲ失ヒ一方ニ偏セルヲ示シタルノ後、ケレテ派ヲ難ズルノコトハ之ヲ他日ニ讓リ、本論ノ終ニ於テ人口ヲシテ宜シキヲ得セシムルノ最良手段ハ如何ナルモノナルヤヲ手短ニ伸述シ、博ク識者ノ教正ヲ乞ハント欲ス、

本論 甲マルサス派ノ評評



第一、マルサス氏ハ己ニ既ニ人口ハ幾何級數ニ從ヒテ

繁殖スレモ、地球上ノ物産ハアルスマナカアルプログレッション術級數ニテ増加

スル故ニ、向來必ス物産ハ人口ノ繁殖ニ速力チ同シ

クスルヲ得サルヤ疑フヘカラスト云ハレタレモ、一

千八百六十年ニ北米ノ人口ハ三分、英國ニテハ一分、

半普國ニテハ英ニ同シク、佛國ニテハ一分ノ四歩一

ノ割合ニテ増加セリ、然ルニ實地右各國ノ物産ハ甚

シキ甲乙ナカリキ、然レハ人口増加ノ割合モ國ニヨ

リテ甲乙ナカルヘキ筈ナルニ、如此クナル差別アル

ルハマルサス氏ノ定則モ未ダ全ク信スヘカラストモ

ノタルヤ知ルヘキナリ加之獨乙經濟博士ロシエール

氏ノ如キハ物産モ或ハ幾何級數ニテ増加スルニ至ル

ヤモ計ルヘカラスト云ハレタリ、之レヲ以テ觀レハ、

益、マルサス氏ノ定則モ確當ナリトハ云ヒ難カラン、

第二、マルサス氏ハ死生ノ數ハ一定ナル如ク云ハレタ

レモ、是モ全ク然ラサルノ理ハ、倫敦ニテ一千六百八

十六年ニハ二十三人ニ付一人ノ死亡アリシカ、一千

八百四十五年ニハ四十人ニ付一人トナリ、一千八百

六十年（此ノ年ニテハ四十六年ニテ人口一倍スルノ

割合ナリキ）ニハ四十四人ノ内一人ノ死亡アリキ、亦

北米ニテ二十七年ニテ人口一倍スル割合ノ時ニハ四

十五人ニ付一人ニシテ、佛國ニテ人口少シモ増加ス

ルコナキ時ニモ、四十四人ニ一人ノ死去アリキ、普國

ニテハ人口ノ増加、英國ノ千八百六十年ニ同シカリ

シカ、二十二一人ニ付一人死亡シタリ、如此親近ナル人

種ノ間ニテモ、生死ノ割合ノ不同ナル、右ノ如ク甚シ

キヨリシテ見ルモ亦人口増加ハ一定ノ數ニ從ハサル

ル明瞭ナリ

第三、マルサス氏ノ如ク戰爭、疫病、饑飢ヲ利用シテ自然ニ

繁殖スル所ノ人口ヲ制限センコトヲ望ム、如キハ、人心

アラシモノ、許諾シ得サル所ナリ、今日文明ノ世ニ

アリナカラ理論上何ホト善美ヲ盡セリトテ、如此無

道不仁ナル希望ヲ抱クハ固ヨリ非ナリ、且ツ之ヲ實

行セントスルハ徒ラニ無効ナルノミナラス、人心ヲ惑

亂シ世人ヲシテ落膽セシムルノ外、益アルコトナシ

抑、今世ニテハ一生懸命ニ勞動シテ生存シ難キコトハ



萬々之レナキ理ナレハ、マルサス氏ノ如ク無用ノ心配ヲ費サシメシヨリハ、寧ロ人々ニ向ヒテ死ニ到ル迄ハ、汝ハ汝ノ汗ニヨリテ糊口セヨト教示スル方遙ニカ優レルコト信スルナリ、

第四、マルサス派中諸家ノ說一定セサルハ、亦同派立論ノ不確ナルヲ證スルニ足ルノ事實ナリ同派中ノ某ハ日用品多ク廉ナルヨリ糊口ノ術容易ナラハ人口必ス繁殖セント主張シ、亦某ハ全ク之ニ反シテ日本俗諺ニアル如ク貧乏子澤山テフ如キコトヲ固信セリ、而テマルサス氏ハ植物食者(米穀)ヲ食スル日本支那ノ如キヲ云フノ方肉食者ヨリ生殖力強シト云ヒシニモ關セズ、他ノ某ハ肉食スルキハ最モ人口繁殖スト前後矛盾ノ說ヲ本據トナシタリ、

第五、マルサス氏ノ防禦法ハ良シヤ一應之ヲ活用セントスルモ遂ニハ無効トナルノミナラス唯、下流社會ノミニ罪ヲ歸シ彼ノ輩ノ良心ヲ害スルヨリ他ナケンノミ何トナレハ氏ノ法ハ人口繁殖ノ根本タル人心ノ極底ヲ改良セズシテ唯外面ヲ一時カキリニ繕フ而已ナ

レハ、戰爭疫病饑飢等ニテ下流ノ死亡ニヨリ人口少シハ減センモ、生存スル人々ノ心、従前ノ如クナランニハ、又復數年ヲ出テスシテ人口舊ニ復スルハ萬止ヲ得サレハナリ、

本論、乙最良防禦法、以上五ヶ條ヲ以テマルサス派所論ノ不充分ナルヲ證シタレバ、今ヨリハ徐々最良防禦法ノ何タルヤヲ明ニセントス、全体天然自然ノ地味、地質、水産、及ヒ人口等ノ増加ノ割合及ヒ其元理ヲ測量精算センコトハ、微淺ナル人力ノ到底及ブ所ニ非ラサルナリ、又人々天賦ノ生殖ノ能ナルモノハ、人ノ人タル正路ヲ踏ミ、義務ヲ完クセハ、之ヲ適宜ニ用ヒテ可ナルヘキナリ、又子孫嗣續ノ爲ニ不可欠ノモノナリ、是人心ニ關スル學術ノ大本タル演繹法上ヨリ明言シ得ヘキノ實事ナリ、然レハ徒ニ過分ノ人口ヲ減少センガ爲メ、天性ノ好ム所ヲ壓抑シ、激烈ナル人力ヲ用ヒテ洗除センコトヲ企謀センヨリハ、先ツ人々ヲシテ正路ヲ踏ミ、其義務ヲ完クセシメ



ンヲヲ務ムヘキナリ、此ノ如クセントスルニハ、教育ニテ  
 人智ヲ進メ、衛生ニテ人体ヲ完全ナラシムルニアルナリ、  
 凡ソ博ク考フルニ、生殖力ト子供養育ノ勞トハ反比例ヲ  
 ナスノコトハ實ニ疑フヘカラサルカ如シ、請フ見ヨ、動物下  
 等ナレハ、下等ナル程養育ノ勞ハ減スレ共、產生ノ數ハ  
 愈々高クシテ幾數萬ナルヲ知ラサル迄ニ増加スルニ非ラ  
 スヤ、然ルニ最高等ノ人類ニ到レハ產生最モ少ナケレモ、  
 養育ノ勞ハ最モ多ク、亦同シ人類ノ中ニテモ養育ノ輕重  
 ニヨリテ產生ノ數ニモ多小アリ、現ニ野蠻草昧ノ人種ニ  
 テハ、養育ニ心ヲ用フルコト最モ輕ケレハ、產生ノ數モ多ク  
 レモ、最高等文明ノ社會ニテハ、養育最モ謹メリ、從イテ產  
 生モ甚野蠻人種ニ比スレハ少數ニシテ、人々平均ノ生涯  
 モ永クナリ、心理、衛生、理財、政法上ニ改良多ク盛ナルヨリ  
 流行發狂諸病愈々其勢力ヲ失ヒ、人身ノ完全ナルヲ增長  
 スルニ從ヒテ、生殖力ハ非常ニ減スルノ傾向アリ、然ラハ  
 亦愈々文化ヲ進メ、教育ニテ人智ヲ研キ、人身ノ完全ヲ謀ル  
 モ亦人口過分ヲ防クニ足ルナラン歟、  
 然ル所以ノ理ハ、以下ノ條ニ於テ二事實ヲ用ヒテ、之ヲ明

ニスルヲ得ヘシ、  
 其一、心經系ハ、生涯ノ長キニヨリ完全ノ度ヲ高クス、  
 其二、生殖力ハ心經系ト反比例ヲナシテ、心經ヲ勞ス  
 ル甚シケレハ、生殖力ハ益々弱シ、  
 其三、  
 神經系 等ハ生物ノ有スル要機ニシテ皆平均  
 生殖系 ヲ得タル時ハ、各系悉ク活潑ナリト  
 消化系 雖モ、一日其一二ニシテ他ヨリ少シ  
 運血系 ニテモ超越スルコトアルハ、他ハ益  
 筋肉系 々衰頽ス、  
 右ノ内第一ハ勿論明白ナル事實ニシテ、第二ハ第三ヨリ  
 起ルモノナレモ、本論ニ於テ最モ緊要ナルモノナレハ、特  
 ニ之ヲ區別シタリ、然レハ第三ノ事實ヲ證明セハ、右三件  
 ハ皆明白ナルヘシ  
 夫レ第三ノ信ナルヤ、熱病ト稱スル重症ニ罹リタル病者  
 ニ於テ唯神經ト運血兩系ノミ熾ナルヨリシテ、終ニ筋肉  
 消化兩系ヲ全ク疲勞セシムルニテモ知ラル、ナリ、亦病  
 人ノ我ハ不豫ナリ、<sup>アロゲンブラレス</sup>不落付キナリ、ナド、唱フルモ、是レ  
 實ニ理アルノ言ナリ、是ニ由テ之ヲ觀ルモ時ト所ト勢ト  
 ニ關セズ、人口繁殖ニ定數アリトノマルサス氏ノ言ハ非  
 ナルヤ知ルヘシ、何者人体ノ内ニテ常ニ前五系ノ變遷分



化スルノ知ルベカラサル實狀ナルニ、マルサス氏ノ言非  
 ナラスンバ、五系統一不同ノ關係ヲ保存スルモノトナサ  
 ルヲ得サルノ不都合アレハナリ、而シテ生殖系ト神經  
 系トノ相敵對セルコトハ知リ易スシ、今假ニ亞弗利加ノ黑  
 奴ヲ將テ歐洲ノ心腦ヲ勞スル人ニ比較セシニ、黑奴ノ  
 生殖力ハ甚ダ強シ幾倍ナルヲ知ラス、是レ才能道德上心  
 腦ヲ勞スレハ勞スルホト生殖力モ消化力ト共ニ減少シ無  
 知無慮肉體ノ甘樂ヲ嗜メハ嗜ムホド生殖並ニ消化力ハ増  
 長スル事實アレハナリ、然ル上ハ人口ノ過分ナルヲ患ヒナ  
 バ、食物ノ彼是ヤ多少ヲ以テ繁殖ノ度ヲ計ラントシ、或ハ  
 人力ヲ用ヒテ強ヒテ無道ノ防禦法ヲ探求センヨリ、教育  
 衛生ヲ盛ニシテ人體中ノ諸系ヲシテ平衡完全ナラシムル  
 ニ優ルノ良法ハナカランノミ深ク考フルニ、此ノ法ヤ自  
 然ノ好ム所ナラン、何者近來人文ノ進歩スルニ從ヒテ益  
 々人力ヲ省キ、天然ノ力ヲ利用スルニ到リテヨリ、人々從  
 前野蠻ナリシキノ如ク分外非常ノ勞動ヲナサス、愈々神  
 經系其他ヲ養成スルノ閑暇ヲ引長スルノ勢アリテ、從前  
 ニテハ筋肉系ヲノミ發達セシメシモ、神經系中睿智ノ如

キハ非常ニ減少ナシテアリシヲ、開明ナルニ從ヒテ筋肉  
 系ヲ少シク弱クナシ、神經系ヲ琢磨シテ之ヲ強メ以テ適  
 宜ニナシ、餘ノ諸系ト共ニ益相平衡ナラシムル自然ノ實  
 況アレバナリ、今日最モ此ノ自然ニ合シテ功ヲ奏スル所ノ防禦法ヲ急ニ  
 用ユルヲ要スルモノハ、下流社會ナリ、然ルニ上中兩流先  
 ツ之ヲ用ヒテ後始メテ下流モ用フルノ習慣ナレハ、上中  
 兩流社會ハ一日モ早ク此ノ法ヲ怠ルヘカラサランコソ  
 願ハシケレ、若シ幸ニ此法ノ行ハレンニハ、物産消耗ノ様  
 モ一變シ、衛生ノ美ト人智ノ明トハ、愈進ニ、人類モ獸心ヲ  
 脱シテ戰亂ヲ卑シ、人心人體共ニ平衡隆盛ヲ致シ、無用ノ  
 消耗ハ利用的ニ變シ、物産ハ繁殖シ、財産ノ分配益々宜シ  
 キヲ得ヘキノミ、左アラランニハ、何ノ暇アリテカ人口過分  
 ナル如キ患ヲ生ルヲ得ヘキヤ、否人體ノ諸系平衡ニナラ  
 ハ、必ス過分ノ繁殖アルヲ得サルハ、既ニ三件ヨリシテ明  
 白ナリ、然レモ勿論此ノ論ニ反對アルハ免レサルナリ、亦  
 アレハトテ惡シ怨ム等ノコトアルベカラサナリ、眞理ヲ探  
 究スルノ志士ハ反對論ノナキコソ返リテ失望スヘケレ何



者反對ノ爲ニ眞ニ全ク論破セラレナハ此レ立論ノ眞正ナ  
 ラサルカ爲ナレハ如何ニ自カラ完全ノ論ナリト思フモ惜  
 ケナク斷然擲棄スヘク若シ自レノ論眞ニ完全ノ正論ナラ  
 ンニハ反對ノ爲ニ少シモ動搖セラレサルナリ然リテコソ  
 實ニ正論ノ愈々精覈正明ナルヲ知ルヘケレ故ニ此ノ法ニ  
 反對論ノ出ルハ固ヨリ渴望スル所ナリ、但シ反對ハナル  
 ベク學術上ノ深考沈志ヨリ出テタルモノナルヲ要スルナ  
 リ、  
 終ニ臨ミテ尙一言スヘキアリ、彼ノ英國ノ國是ヲ左右  
 スルモノハ金滿家ナリノ評ハ信ニシテ實ニ餘リ文化ニ誇  
 ルニモ似ス感稱スヘキコト少ナシ一旦マルサス氏ノ説公布  
 シテヨリ無仁強慾ナル地主金主等ハ氏ノ説ヲ已レノ田ニ  
 水ヲ引クノ口實ニ供シテ、云ク、夫レ人口ヲ増加シ貧民ヲ  
 産出シ、租稅ヲ重クシ、物價ヲ貴ラシメ、上下ノ困難ヲ招ク  
 主トシテ日傭取及ヒ小作人等カ養育ノ見込ナクシテ、子  
 孫ヲ繁殖セシムルニ由ル、彼レ等ハ自ラ養フ能ハスノハ  
 生ム勿レテフマルサス氏人口論ノ一原則ヲ犯シタルモノ  
 ナレハ、之ヲ社會ノ犯罪人ト認メテ可ナリ、故ニ速ニ彼等

ノ困難ハ省ミスシテ、悉ク米國ニ移シ、或ハ其他ノ島嶼ニ  
 流シテ、徒刑ノ所置ニ服セシメシムルニハ、必スヤ右ノ如キ無  
 數ノ困難ヲ我等社會ニ與フル能ハザラント、是偏頗ヲ極  
 メ未タ沈思深慮セサルノ言ナルノミ、良シヤ今地主等ノ  
 言葉ニ從ヒテ下流社會ヲ一掃セントスルモ亦跡ヨリ人口  
 ハ漸々繁殖センノミ、是レ死モ多クシテ、產生ノ多キ事實  
 ヨリシテモ知ラルヘク、止ムコト得サルニ出ヅルナリ、亦  
 一旦人口減セハ勞銀ハ貴ク、物價ハ賤シカラシム、然ラバ人  
 口増サスノ居ラルヘキヤ、必ス早晚舊ニ服シ、何ノ功績カ  
 殘ラン、人アリ云ク、一掃セシ後舊ニ復サハ、復スル度毎ニ  
 一掃センノミト、此レ實ニ仁心ナキノ語ナリ、其結局タル  
 ヤ人心ヲ狂惡ナラシムルノミナラズ底ナキ桶ニテ水ヲ運  
 ブニ同シク勞シテ功ナカラシム夫レマルサス氏ノ論ハ、少  
 シク上流社會ヲ保護スルニ汲々トシテ一方ニ偏セリ、偏  
 スレハコソ眞理ヲ蔽フダレ、左アランコトハ實行シ難シ、良  
 シヤ人カニ由リテマルサス氏ノ防禦法ヲ一時實行スルコ  
 アルモ、結局無効タランノミ、先ツ以上ヲ以テ本論ノ終リ  
 トナス



井上巽軒曰、纏々數千言、科學ノ法ニ由リテマルサス  
 氏ヲ抵排シ、殆ド餘蘊ナシ、何等ノ快文ツ、夫ノ泰西ノ  
 學ニ於テハ一知半解、未ダ科學ノ法ヲ知ラズシテ、傲  
 然尊大、自ラ大先生ヲ以テ居リ、而シテ後世ニ芝麻通  
 鑑ト稱セラル、者、此等ノ文ヲ讀デ少シク研究スル  
 所アレ、

雜報

○東京大學に於て古器物採集貯藏の義まつき太政官第五  
 拾八號を以て左の如く達せられたり

警視廳 府縣

文部省所轄東京大學ニ於テ考古學研究ノ爲メ教員學生  
 等ヲ各地へ派遣シ介墟洞穴ヲ檢査シ地方廳又ハ所有主  
 へ協議ノ上埋没ノ古物ヲ採集スルキハ直ニ同學ニ貯藏  
 爲致候條爲心得此旨相達候事

明治十五年十月二日

太政大臣三條實美

○有名なる鷺津毅堂先生の本月五日病死せられたり眞  
 惜むへ死事よそあり

前號又記載せし如くドクトルナウマン氏の白根山を登  
 上せられ實況を檢し信州澁温泉より越後路へ向け巡迴  
 せられたりよし隨從の理學士山田皓氏よりの書簡中又同

山の噴發略記を載せられたれの茲に抄寫を

○抑白根山ハ上州吾妻郡草津村ニ在リ同村温泉場ヨリ三  
 里弱澁峠ヨリ二十町余登山容易ナリ高サハ直立六千余丈  
 (水銀晴雨計ノ觀測記アレモ未ダ計算スルニ暇ナシ)頂上  
 ニ三箇ノ池アリ四面大凡百三十四メートルノ高サノ嶺峯  
 ナリテ圍繞ス第一ヲ水釜、第二ヲ湯釜、第三ヲ空釜ト云フ  
 第一、第二ハ水ヲ以テ滿チ第三ハ空虚ナリ尤モ第二ハ水  
 面ニ硫黃ノ浮ブチ以テ前時熱湯タリシヲ推測スルニ足  
 レリ此外地形ハ凡テ舊時噴火山タルノ状態ヲ備ヘ四近ノ  
 岩石ハ粗面石<sup>トカイト</sup>ニシテ往々燒石<sup>ヲバテ</sup>モ散在ス白根山ノ舊記録ハ  
 百方索搜シタレモ終ニ得ル能ハス其以前戸長役場ニ備ヘ  
 アリシモノハ出火ノ際烏有ニ屬セシト云ヒ今處光泉寺中  
 ニ在ルモノハ唯草津温泉由來記ニ過ス土人ノ説ニ或ハ七  
 十年前噴火セシト云ヒ或ハ其頃迄ハ湯釜ノ水ハ高温度ヲ  
 有セシト云ヒ何レニシテモ往昔ハ度々噴火セシモノナラ  
 シ此度噴出ノ形狀ハ粗草津村戸長ニ問ヒ且白根山下二十  
 町半ニ一茶店アリ其主人ハ親ク現況ヲ目撃シタル由ナレ  
 ハ尋テ行キテ大概ヲ聞得タリ其概略ハ(以下次號)